

その後直に、隠者は病氣に冒されて死んで了つた。立派な葬式が彼のために行はれた。監督僧正は町中の僧侶を連れて来て、鎮魂の歌を歌つた。その頃自分は小さな青い焔がこの老人の墓の上に終夜見られると云ふことを聞いた。如何にも悼ましい、が、また實に卑しいことだと思ふ。

## 十二

その後直に自分の生活には激しい變動があつた。

ミクハは病氣になり病舎に送られた。自分はその仕事を引受け、二人の助手が自分に與られた。三週間を経つてから、食料係（寺院の納所坊主）が使を以て自分を喚び、ミクハは全快したが、自分の頑固な性質を嫌つて、どうしても自分と一緒に働くのを拒んで居ると云ふことを話した。食料係は自分にこれから森に行つて木の幹と根を掘らなければならぬと云つた——その仕事は一種の懲罰とされてゐた。

「自分は何かよくないことでもしたんですか。」と自分は云つた。

その時、教父アントニウス——美僧——は其處に遣つて來た、おとなしく一隅に坐を占めて聞いて居た。

食料係はこんなことを云つた。

「お前は何故この義務が指定されたかを問ふのか、それはお前が頑固で長者の意に従はない性質のためさ。吾々の社會でお前の傲慢な態度はお前の年齢と位置とに相應しくない。それで相當な懲罰を受くべきだ。最も尊敬すべき僧正は特に好意を以て、お前に比較的輕微な仕事——事務所のある仕事——を命ずる積であつた。然しお前はそれに不適當であることが解つたのだ。」

彼は長い間、鼻聲で、冷淡な調子で話した。然しそれは彼れ自身の心からでなく、單に彼の職務上の必要から、述べたまでいあることを、自分は知つた。その間、教父アントニウスは、髭を撫でながら、煖爐に凭れかゝつて坐つてゐた、彼は何うかして

自分を激勵しやうとしてゐるやうに、一心に自分を見守り、立派な目に微笑を湛へてゐた。自分の持つてゐる性格を、この美僧に見せたいと思つたから、突如、食料係にかう云つた。

『自分は別に立身しやうとは思ひません、然し、譯の分らない不當な屈辱には服従することは出来ません、正義は自分の唯一の希望ですから。』

食料係は眞赤になつて、杖で、床の上を打つて、

『この、無禮漢！』と叫んだ。

教父アントニウスは彼の方に身體を屈め、何か囁いた。

『それは問題外さ！』と食料係が云つた。『彼奴は不平を言はずに罰を受けんければならぬ。』

教父アントニウスは肩を聳かし、自分の方に向いて、温い音楽的な低音で云つた。『規律に服従しなさい、マトゥー！』

彼はこの一語と、それに伴ふ親切な瞥見で、自分を征服して了つた、自分は食料係に謙遜に敬意を示し、アントニウスに鄭重な挨拶をした。その時自分は森の仕事を何時から始めるかを尋ねた。

『三日経つて、それまでお前は牢舎に這入らなければならぬ。』

若しアントニウスが居なかつたら、自分は屹度彼が全身の骨節を打ち砕いたに違ひない。自分はその言葉を、アントニウスに接近する暗示として解釋した。それで、どんなことでも不平なしに忍耐しようと思つた。

自分は執務所の下にある狭い一室に檻禁された。その中で自分は立つことも動くことも出来なかつた、只坐はる丈の空位があるのみであつたから。土地の上に濕々した腐つた藁が撒布されてあつた。この濕氣に充ちた穴の中は宛然墓場のやうな沈黙で支配されてあつた。其處には二十日鼠さへも居なかつた。眞暗で、自分の手さへ見ることが出来なかつた——やつと、顔にあてるやうにして見ることが出来た。

其處に自分は一言も云はないで坐つてゐた。自分は石のやうに重く氷のやうに冷たく感じた。自分は種々な思考を止めるやうに齒がみした。その種々な思考は、火の燃えついた石炭のやうに、赤く熱して自分を焦した。自分は何か噛むものがあつたら、噛んだらうと思ふ。自分は頭髪を掴んで左右に搖き、心のどん底で怒り叫んだ。「お、神よ、何處にあなたの正義があるか、それは全能の法律を冒すものには掌中の玩具に過ぎないではないか。地上の権力者は、狂熱して、それを踏みつけてゐるではないか。自分は全能の眼に何と映するか、自分は放肆な氣狂の犠牲か、それとも、あなたの美と正義との擁護者か。」

全體から、自分は僧院生活を最も偽善的な嘲笑すべきものと知つた。何故に此等の僧侶を「神の僕」と云ふか。どの點に於て彼等は俗人よりも神聖か。自分はあらゆる困苦と不幸の中に沈む百姓の生活をよく知つて居る。彼等は神から遠ざけられてゐる、彼等は酒も飲めば、仲間同志で喧嘩もする、竊盜もする、あらゆる種類の罪惡を犯す。

然し一方に於て彼等は神の掟に就ては全く無智で、徳を修める時も力も持たぬ。彼等は皆各自が所有する僅か許りの土地に束縛せられ、強い鍵鎖——餓餓の恐怖——で彼の小屋の四壁にくくり付けられてゐる。此等の憐れな困苦者から何を期待することが出来るか。然しこの僧院に於て各人容易く富裕に生活することが出来、智識の書物は其處にちやんと備はつて居る。然し、彼等の中で誰が神に正直に事へてゐるか。只ギリシヤのやうな貧血な虚弱者のみだ。餘のものに至つては、神は只彼等の不正の口實と虚偽の源泉として役立つのみだ。

僧侶が婦人を見た忌はしい淫猥、彼等のあらゆる肉慾、怠慢、泥酔、そして慈善箱の内身を分配する時の争論、恰度墓場の鴉のやうに、如何にも野蠻らしく不平を鳴らす状態を自分は考へてみた。自分はまたギリシヤが、僧院について居る百姓は骨折つて働けば働く程、段々多く借金を増すのみだと云つたのを想ひ起した。

その時、ある思想は自分の頭腦に浮んで來た「自分は大分長い間、此處にゐた。然

し自分の心靈上に何の利益があつたか。傷害と水泡の外には何の得る所もない。何に依つて自分の精神を豊にしたか。また自分は何か價値あるものを學んだか、人類に對する憎惡を起さしめた惡徳と醜行の外には何もない。』

牢獄は墓場のやうに沈黙であつた。自分の耳には梵鐘の響さへも聞えなかつた。自分分は時間を測る方法がなかつた。牢獄の壁の外は晝であるか、夜であるかを知ることが出来なかつた。誰が人間から日光を奪ひ去らんとするか。

濕氣と徴びた暗黒とで自分の氣持は壓へつけられたやうになつて了つた。自分の精神は恰も一生の行路に如何なる光をも發しないで焼き盡されてあつた。神の智識と正義とに對する自分の信仰——自分の心に最も尊い信仰——も溶け盡して消え失せた。然し教父アントニアスの顔は、輝く星のやうに自分の前にきらめいてゐた。自分のあらゆる思想と感情とは、火焰の周圍に飛んでゐる蛾のやうに彼の上にはね廻つた。自分は彼を假想して話しかけた。凡て自分の艱苦を彼に打ち明け、その忠言を求め、聞

黒の中に、その親切なる眼が輝くのを見た。彼のための此の三日間の入牢は自分にとつて貴いものであつた。それが終つた時、自分は全く盲人のやうであつた。自分はよろめき、頭は誰か他の人のものでもあるやうに不思議に感じられた。同僚のものは嘲笑してかう云つた。

『さて、お前は精神を洗ひ清めたか。』

その夕に僧正は自分を喚び出し、その前に坐らして、長い説教を聞かした。

『聖書に「予は罪人の齒を壓し碎いて、彼の首を輓に懸ける……」と書いてある。』

自分は一言も語らず、強い克己を以て堪へ忍んだ。教父アントニアスは、贖救者として自分の前に立つた。その親切な瞥見が自分の怒つた唇を封じた。

そして直に僧正は彼の性格の柔しい方面を示した。

『お前は馬鹿だ！』彼は云つた『お前には私共がお前の性質を考へて、ためになれかしと望んでゐるが見えないか、お前の熱心と勤勉とは滿更、知られないでもなし、

相當な才能を有つてゐることを認められかけてゐる。それで、僕は二つの仕事の中の一つを撰ばせる、お前は事務所で働くか、それとも教父アントニオの平僧として働くか。

自分は温い噴水を浴びせられたやうに感じ、歡喜の餘り息を塞らした。そのため自分は容易に返答することが出来なかつた。

「私は……お願ひします、……私は平僧になりたいんです。」

僧正は眉を顰め、暫らく考へた。そして鋭く自分を見詰めた。

「若しお前が執務所に行くなら、森で働くには及ばぬ、反對に若しお前が教父アントニオの平僧になれば、森の中で多くの勞働をしなければならぬ、どうだ？」

「何うか、平僧……になるやうに。」

「まあ、お前は馬鹿？ 執務所の仕事は容易しい上に尊敬されて居る！」  
然し自分の決心は動かなかつた。

その時、僧正は頸垂て黙つて考へた。

「ではよろしい。私はお前の祝福を祈る、お前は奇妙な奴だ、それで私共はお前の監督をしなければならぬ。お前の出来心でやつたことを誰が知るものか。誰が知ることが出来るか、兎に角氣をおつけ！」

自分は森に行つた、まだ寒い卯月であり、仕事は却々骨が折れた。

古い木株が地中に深く埋れて居た。眞直な根が土地の中に深く這入り込んでゐた。小さな根は無數にあつて、土地に緊かと密着してゐた。堀つて堀つてその根を無暗にたゝき切る、それから、それに一匹の馬を括りつけて曳かせる。馬が勢一杯の力を出して曳かうとしても動くものは只馬具位のものであつた。日中まで自分はうんと云ふ程働いた、馬も震へて、泡沫で被はれ圓い眼で自分を見詰めて、こんなやうなことを云つてゐるやうであつた。

「俺はもう出来ぬ、俺には到底やりきれぬ。」

自分は馬を愛しみ、柔しくその首を撫てやつた。

「よろしい、自分もよく知つてゐる！」と自分は云つた。そして今一度やつて見ようと、元の仕事に歸つた。小さな馬は自分の顔を見て、その頭を動かし、同時に身體を震はしてゐた。馬は伶俐な動物だ。そして馬が、人間は自らを愚弄してゐることを知つてゐると自分には思はれた。

その頃自分はミクハと争論した、それは重大な結果を齎らした、自分は中食の後、仕事に出掛け既に森についた。その時突然、彼は混棒を手にして、自分の後に立つてゐた。ミクハは怒つて顔を歪め、齒を露出して熊のやうに唸つてゐた。

ミクハは立ち止まり、自分を待つてゐた。一言も云はずに混棒をふり上げて自分の的つた。自分は時を移さず、ひらりと身をかはし、胃を撞いて、彼を推し倒し、その胸腔の上に坐り、彼の混棒をひつたくつて云つた。

「お前に僕は何か悪いことをしたか、何故お前は僕を打つか。

ミクハは自分の下に足搔ながら、亂暴に答へた。

「僧院を出て行け！」

「どう云ふ譯で？」

「俺はお前の目につく所に居ることが出来ん、それが厭ならお前を殺すまでさ！」

その兩眼は血走つてゐた。そして兩眼から滴り出る涙は血のやうに赤かつた。その唇は白い泡沫で汚れてゐた。彼は吾輩の衣服を引き裂いた。自分を掴んで搔きむしり、顔にとりつかうとしてもがいた、自分は柔しく振り、推し退けて云つた。

「お前は法衣を着けてゐながら、宛然獸だ、お前は毒惡の塊だ、全體この状態は何う云ふ譯だ！」

彼は泥土の中に坐つて叫んだ。

「行つて了へ、俺の精神を危くすな！」

彼の心に浮んでゐたものを自分が想像し得たやうな氣がしたので——それは少し前

に秘密な罪でもつて彼を驚かしたから——自分は極静に言つた。

『多分私がお前さんの不正の秘密を洩らしたと考へて居るんだらう、だが、それならお前は大變に誤つて居る、私は決して告げ口なんぞはしないよ。』

彼は自ら元氣をつけて、一番近くにある木によるよると近寄り、それに固くくつついて其の樹の幹の蔭から、荒々しく自分を見詰めて唸つた。

『お前が皆のものに話したなら、俺は救はれる、若し俺が公然自白したなら、彼等は俺を許して呉れる、然し、おい、破落戸！お前は俺を賤すんである、俺はお前のやうな傲慢な異教者には服従が出来ない、足許の明るい中に、さつさと出て行け！でない」と血の罪はお前に歸せられるぞ。』

『よろしい、二人の中の一人がどうしても行かなければならんと云ふなら、お前が行けばよい、自分はどうかつても行かない。』

彼はまた突掛つて來た。吾々二人は泥土の中に倒れてござ、と轉げた。自分は彼

よりは遙に強かつた。それで直に自分で起ち上つたが、相手の男は聲をあげて泣きながら、其處に坐つてゐた。

『聽け、ミクハイロー！』と自分は云つた。『自分は近い間に出て行くよ！然し今行くことは出来ない、それはお前を輕蔑するためでないが、是非とも今暫らく居なければならぬ必要があるから、自分は此處に居なければならぬ一つの理由がある。』

『お前の父の所に行け、悪魔！』と彼は唸つて齒がみをして居た。

自分は彼が倒れて居たのを捨て、行つた。二三日經過して後に、彼は町にある僧院に送られた、そして自分は再び彼に會はなかつた。

### 十三

樵夫としての自分の仕事は了つた、そして自分は新しき外衣を着けて、教父アントニアスの庵室に行つた。

この時代の自分の生活は第一日から最後の日まで、今も尙ほ歴々と記憶に残つて居る、丁度皮膚に刻まれ、脳に烙きつけられたやうに。

彼は庵室の周囲を自分に案内し、静に、どうして、何時、どんな事柄について自分が彼の僕として働くべきかを教へた。その庵室の一つは、聖俗の書籍を詰め込んだ書棚が列んでゐた。

『これが俺の禮拜堂だ！』と彼は云つた。

この室の中央に大きな卓子があり、窓の側に贅澤な肘掛椅子があつた。卓子の側には高價な綴錦を掛けた長椅子があり、卓子の前面には刻印のついた滑皮で覆はれた脊高椅子があつた。彼の寢室には大きな寢臺、法衣や襯衣を入れる戸棚、手洗臺、大きな鏡附きの化粧臺、澤山の刷毛、櫛、灰色の曇などがあつた。その第三室——飾付のない見窄しかつた——の壁の中に、二つ秘密な戸棚が備付けられてあつた。その一には葡萄酒や有ゆる種類の酒があり、他の一には、茶器、料理した肉、チャム、その他

あらゆる種類の糖菓があつた。

最後に、彼は自分を圖書室に連れて行つて云つた。

『お掛け、お前は今俺の生活方法を見たらう。何うだ實に僧院らしいだらう。』

『いゝえ、僧院の規定に叶つてはゐません。』

『何でも冷酷に判断する習慣のあるお前は、俺にまで判断を下さうとするんだな。』

そして、彼は、さながら寺の塔のやうに、傲慢な態度で衝立ち、自分の方を向いて笑つた。自分は彼の容貌が美しいので、ひどく彼を愛した。然しその微笑は大に自分を苦しめた。

『自分が貴僧を責むるのか何うだか知りません。』と自分は答へた。『然し、兎に角自分は貴僧を了解したいんです。』

彼は真に輕蔑したやうに笑つた。

『お前は私生兒ではないか。』



「えゝ。」

「お前の血統は餘程貴いんだ。」

「貴い血統とは、どう云んでせうか。」自分が云つた。

彼は笑つて、語氣を強めて、云つたことを繰返した。

「貴い血統は傲慢な性質を造るものだ！」

その日は晴れ渡つた好天氣であつた。太陽は窓を通して輝き、アントニアはその光線の中に包まれてゐた。

突然、ある思想が自分の頭腦から飛び出して蛇のやうに自分の心臓を刺した。自分は椅子から飛んで強くその僧侶を見詰めた、彼もまた飛び上つた。自分は彼が懐劍を取上げて弄んでゐるのを見た。

「どうしたんだ。」と彼は尋ねた。

自分は彼の間に對へなかつたが、かう云つた。

「貴僧は自分の父親ではありませんすまいか。」

彼の顔は歪んできつくなり、蒼くなつた、氷の塊にても彫りつけたかのやうに。彼は兩眼を半ば閉ぢて、眼中の光を隠し、柔しく云つた。

「俺はさう考へない、然しお前は何處で、何時生れたのか、年は何歳だ。そしてお前の母親は誰だえ。」

どう云ふ風に自分が棄てられてゐたかを話した時、彼は微笑して短劍を卓上に置いて云つた。

「俺はその地方に居なかつた、——兎に角その頃に。」

自分は慈善を求めて斥けられたやうな不快を感じた。

「それで、俺がお前の父親としたら、それがどうなんだ？」

「何でもありません。」と自分は答へた。

「俺の持論はかうだ、吾々兩人は肉體上からは父も母もない場所に住つてゐる、然し

只心靈の上から父あり母ある場所にある。つまり、此世界の存在する間、吾々は皆棄てられた小兒だ、——人生と云ふ苦惱の中の兄弟だ。人間は只地上のアクシデントであることを知つてゐるか。』

自分は彼の眼の表情から、調弄はれてゐることを知つた、しかし、まだ苦しい感情を有つてゐた、それで自分は不思議な飛んでもない疑問を起した。それを確かめるか、さもなければ全然忘れるかしたいと思つた。

『何故、貴僧はその懐剣を取り上げましたか。』

アントニウスは自分を見詰めて柔しく笑つた。

『お前は餘程穿鑿好きな奴だな、俺は何の譯もなくそれを取り上げたんだ。何故だか、眞實の處、自分にも分らぬ、些細なことではないか。』

彼は自分に短剣を手渡した、それは鋭く尖つてゐた、その鋼鐵の刀身は黄金で、その柄は銀で鏤められ、紅石或は他の赤い石で裝飾されてあつた。

『それは亞刺比亞の職工の手になつたんだ。』と彼は説明した。『俺はそれを紙截として使ひ、夜間はそれを枕下に置くんた、こゝでは俺は金持と思はれてゐるよ、そして附近には貧乏人が澤山あるし、加之、この庵室は孤立してゐるから……』

烈しい芳しい香氣が、アントニウスの手と劍から發散した。それが自分の頭腦を刺戟した。

『もつと話さうぢやないか、』とアントニウスが嚴肅な和いだ低い聲で云つた。

『お前は何時も女が俺を訪ねて來るのを知つてゐるか。』

『自分はさう云ふことを聞いてゐます。』

『その女が俺の妹と云ふのは眞實ではないよ。』

『どうして貴僧は自分にそれをみな話しますか。』

『たつた一度だけ、お前は凡てのことを知り、そして何ものにも驚かされないために、お前は人情本が好きかね。』

『自分は何もこれまでに讀んだことがありません。』

彼は赤い滑皮で装釘された小冊子を書棚から引き出して自分に渡して云つた。

『行つてお茶の用意をして、それからこれをお讀み。』

自分はその書物を開いた、第一頁に裸體を現はしてゐる男女の繪があつた。

『自分はこんな書物は讀みません。』と自分は云つた。

彼は自分に近寄つて嚴肅な調子で云つた。

『そしてお前の精神上の忠言者がさうするやうに命令したと想像するの。だか、お前はこの理由が充分に呑み込めないか。あつちに行つて了へ。』

自分は彼が住居として定めて呉れた小舎の中にある寢臺に坐つた。そしてつくづく悲哀を禁じ得なかつた。自分は全く衰弱を感じ、全身が戦き慄へて、恰當毒害されたやうであつた。さて今何處に彼が自分の父であるか云ふ觀念があるのか知らぬ。どうしてそんなやうな考へが自分の頭腦に這入り込んだかについて迷つた。心靈に關する彼の

言語——心靈は血によつて造られてあると云ふこと、人間に關する彼の言語——人間

は地上のアクションデントであると云つたことを自分の心に喚び起した。凡てこれは明かな異端邪説だ、自分が彼に尋ねた時、歪んだ顔をしたのを想ひ起した。それから例の書物を開いて見た、それは一人の佛蘭西の騎士と二三の婦人の繪であつた。何故自分にこの書物を呉れたんだらう？

彼は呼鈴を鳴らして自分を呼んだ。自分はその命令に應じて赴つた。

『さて、』と彼が親しげに云つた。『何處にお茶がある？』

『何故、貴僧はこの書物を自分に呉れました？』

『お前が罪惡とはどんなものかを知り得るためだ。』

自分は彼の動機を聖くしたと想像し、歡んで胸を跳らした。つまり、彼は自分に證明させようと望んだ。自分は非常に丁寧な挨拶をして行つた、そしてお茶を用意して、その室にそれを運んだ。彼は茶を待ちかねてゐた。自分が室を去らうとした時、彼は

云つた。

『お待ち、俺と茶を飯まう。』

自分は心から彼に感謝した、以前から親しく知合になりたいと云ふ切なる刺戟を感じてゐたから。

『俺にお前の過去の生涯と、此處に來た理由を話してお呉れ。』

自分はこれまでの生涯を殘らず彼に話し始めた、話す價値のあると思はれる思想や衝動は一つも隠さずに打明けた。彼は半ば眼を閉ぢ非常な注意を拂つて耳を傾けてゐた。それで茶を飲むことすら忘れてゐた。

月が彼の背後の窓を通してさし込んで來た。樹木の黒い枝が、天空の赤い背景に浮いて立つてゐた。その間自分は物語をし、同時に胸に十字を組んでゐる白い彼の手を見詰めてゐた。

自分が物語を了つた時、彼は自分に黒い甘い酒を一杯注いで呉れた。

『お飲み。』と彼は云つた。『お前は教會で聲高く祈禱してゐる時俺を喜ばした。僧院生活はお前のやうな煩悶者には、大して慰安を與へぬと思ふ。』

『いゝえ。』と自分は答へた。『自分は貴僧が助けて下さると云ふ大きな希望を持つてゐます。貴僧は學問があるから、きつと、あらゆる煩悶の中に忠言して下さることが出来るに違ひありません。』

彼は柔しく、自分を見ないで云つた。

『俺はたつた一つのことを知つてゐる。若しお前が山に登るなら、お前は絶頂に眞直ぐに行かなければならぬ、そして若しお前が墮るなら、その時は谿の底に墮らなければならぬ。俺は自分で此の教に従つてゐない事を認めてゐる、俺は餘り怠惰であり過ぎるから。人間は憐れな種類の動物だ。何故さうであるかは説明が出来ぬ。人生は華美なもので、この世界はその誘惑を有つて居る。どんな種類の娛樂でも人間には自由に開放されてゐる。……然し人間は現在も將來も感然なものだ。何故さうであるか。』

それは説明の出来ない問題だ……。そして加之、自分はそれ以上考へようと思はぬ。」  
夕の禮拜の鐘が鳴つた。彼は驚き立ち上つて云つた。

「静に行け、俺は草臥れてゐるが、禮拜に出なければならぬ。」

若し自分が賢くあつたら、その時其處を去つて了ふ筈であつた、それは兎も角、その場合に、自分はこの男に就て愉快な回想を持つて行つた方がよかつたから。然し、自分には彼がどう云ふ積りで云つたのか解らなかつた。

自分が寢臺に行つて手足を延べて休んだ時、彼が貸した書物を見つけた。自分は蠟燭に火を點け、精神上の指導者に單純な感謝から、それを讀み始めた。自分は例の騎士が何らし、男どもを欺き、夜分に、彼等の妻と密會するか。どうして男どもが彼を計略に陥れ、劍を以て彼を刺し殺さうとするか、然しどうして彼は何時も逃げ果せるかを讀んだ。凡てこの事件は自分にはしつこいもので解らないものに思はれた。然し、ある青年はこんな悪戯を成し遂げることに快樂を感じ得ることを意味してゐるや

うにも理解した。が、どうしてこんな問題に關する書物を書くことが出来るか、或は精密に、どうして自分がこんな下らない無益な書物を讀まなければならぬかを理解することが出来なかつた。

再び、自分は實際どうしてアントニアを自分の父ではあるまいかと疑ふやうになつたことを思ひ返してみた。この思想は錯ついた、腐蝕した鐵と同じ方法で自分の心中に咬み込んだ。その時自分は眠つて了つた。

自分は誰か、夢に横腹を打つのを感じた。そして眼を醒まして飛び上つて見ると、それはアントニアであつた。

「俺は再三呼鈴を鳴らしてお前を呼んでゐた。」と彼が云つた。

「お許し下さい、どうぞ。自分は非常に煩悶してゐたもんですから。」

「俺はそれを知つてゐる。」と彼は答へた、そして附けたした。「神爾とともなれー」

「俺は僧正の所に行かうと思ふ。」と彼が云つた。「さて俺の指導に従つてお前の義務に

とり掛け。ハアさう、お前はあの書物を読んだ？。然しお前の云つた通りだ、それはお前に適當する書物でない。お前がそれを讀み始めなかつたらよかつたのに、お前は何か他のものを要求してゐるだらう。』

自分は彼の寢床をとつた、その敷布と白い寢臺掛とは自分がそれまでに見たことのないやうな高價なものであつた。そしてそれ等はみんな強い芳しい香料で浸されてあつた。

その時自分は酔ふやうな霧の中に、夢心地になつて來た。自分はアントニアスの外何ももの見なかつた。そして彼が只幽暗の中に、反射したもののやうに見えた。——自分が理解することの出來ない二重の意象として彼を見た。

彼は何時も自分に親切に話した。然し自分はその眼中に諷刺的の光があるのを見た。神の名はその唇から極めて稀に出る。彼は神と云ふ代りに精神と云ふ言葉を用ひ、惡魔と云ふ代りに自然と云ふ言葉を用ゐた。然し名辭こそ違つてゐるが、意味は全然自

分と同一であつた。そして僧侶や宗教上の儀式を少し馬鹿にする癖があつた。

彼は大分酒は飲んだが、泥酔したのを見たことがなかつた。只顔が青白くなり、眼には傷ましい光が輝き、唇の赤みが愈々濃くなり、青ざめた透通つた頬は愈々青白くなつて來た。また屢々眞夜中に、或はもつと遅く僧正の所から歸つて來て、自分を起し、酒を命ずることもあつた。こんな場合に、彼は坐つて——屢々曉天の鐘が鳴るまで、重い聲で絶えず話してゐた。

彼の談話を會得することは難かしかつた、そしてその多くは忘れて了つた。然しそれ等は皆最初に自分を驚かしたことを知つてゐる。自分にはその談話は、地球の表面に生活してゐる凡てのものが捲き込まれてあつた深い奈落に通じてゐるやうに思はれた。屢々彼の談話は不思議な程自分を陰鬱にし、精神を沈靜にした、それで自分は叫んだ。

『つまり……貴僧は惡魔ではないんですか。』

彼はひどく怒つて、傲慢な態度で話した。酔ばらつた時、兩眼は丁度頭の中に引込んで了つて、不明になり、分けが解らなくなつた。微笑が絶えず青白い顔容から閃いた。長い華奢な指は青黒い髻を玩物にして、扭たり、解いたりしてゐた。そして冷たい雰圍氣が彼から發生するやうに見えた。それには自分も全く嚇されざるを得なかつた。

前にも云つたやうに、自分は悪魔の存在を信じない。聖書によつて、自分は悪魔が傲慢で喧嘩好きで、何時も人間を誘惑しようとしてゐることを知つてゐる。然し自分は教父アントニアスの性質に、奸計の如何なる痕跡をも發見しなかつた。彼は灰色に人生を描寫し、何れ程それがとせつもないものであるかを自分に示し、そして人間を、速度の上にも多少はあるが、——深淵に突進する怒つた豚の群と同じやうに見た。「でも貴僧は人生は非常に光榮あるものだ」と云はれました。」と自分は答へた。「お前の言ふ通りだ——若しそれが俺の豫想に應ふものとすれば。」と彼は嘲笑的の笑

を附加へた。凡てこんな會話から、自分は只その笑を記憶してゐるのみだ。それは丁度彼が凡ての方面から逐拂はれたかのやうであつた。而かも彼は多く放逐に苦しめられないで、凡てのものを尻目にかけてゐた。彼は鋭敏な思想家で、問題を非常に深く探究したが、どうもやまく自分を納得させることが出来なかつた。度々自分はその大膽な高飛車の智識によつて迷はされてあつた。

極めて稀ではあるが、折々、彼は怒つて、自分に叫んだものだ。

「俺は貴族で、偉大な種屬の後裔だ。俺の祖父と曾祖父は露西亞王國を建設した。其等の名は歴史の上に記してある、そしてこの厩屋小僧は大膽にも自分の邪魔をしようとしてゐる。然しそれが世界の状態だ、美は破壊され、只不潔なる惡漢のみが残つてゐる、そして彼等の中に、只一人の孤立の貴人があるのみだ。」

かう云ふ種類の物語は自分は餘り好かなかつた。多分自分の祖先も亦餘程貴い血統であつたものらしい、然しそれが人間に何等の利益を與へるか。事實のみが最も重要

なものだ。

屢々彼は肘掛椅子に坐り、青白い血氣のない顔容で、何時も口癖に云つてゐる。

『あの坊主達はまた賭博をして自分の金を奪ひ取つた。マトヴ！。僧侶とは何か。彼は普通人から自身の卑行を隠さうとする人間だ、一般普通の人間を恐れてゐるから。でなければもつと強く自身の弱點を自覺するのだ、それで世間から滅ぼされなうため。にこの世界から逃げるのだ。そして後者は僧侶の中で最も善く最も興味あるものだ。その餘のものは單に家なしの賤民、この世界の塵、世界の死胎子だ。』

『して貴僧はどうです。』と自分は尋ねた。

自分は厚がましく、この疑問を少なくとも十回以上彼に質した。然し彼は何時も、こんなことを云つて自分の間に答へた。

『現在に、お前はアクシデントの子だ。して、この後もさうであらう……』  
彼の神もまた自分には神秘であつた。自分は彼が素面である時に、これを遠廻しに

誘き出さうとした。その時彼は屹度聖書から陳腐な文句を引用して笑ひながら答へた。自分の考では、神は聖書以上であつたことを自白する。それで、自分は彼が酔つてゐた時、同じ質問でもつて迫つてみた。然しその場合でさへ彼は胸中の秘密を洩さなかつた。

『マトヴ、お前は狡猾な奴だ、それと同時に頑固な奴だ。それは残念ながらお前のためにならぬ。』と彼が云つた。

自分は自ら考へた。『それは人が違ふ、お前さんから聞くことでなく、自分から云ふことだ。』その時、自分は彼が立派な智的天稟——それは自分が貴んでゐた——をその庵室で浪費するのを見た。然し自分はこの質問を止めないで、却て益々頑強に問い迫つた。すると、一日不承無承にこんなことを云つて、その無智を自白した。

『マトヴ！俺はお前以上に神に就いて明かな意見を有つてゐないのだ。』  
『確に自分は心の中に神の表現を形成することは出来ません。が、それでも』と自



分は答へた。『自分は神を認めてゐます。神の存在の有無を、貴僧に尋ねるのではありません。然し人生が信頼する法律を如何に解釋するかに就てお尋ねするのです。』

『これ等の法律は宗規に關する著書の中に明かである。若しお前が實際に神の存在を感じ得るとすれば、それは大にお前の爲に祝すべきだ。』

彼は自分に或る酒を注ぎ、自分の杯に彼のを當てちんちんと音をさせ、直に彼の杯を飲み干した。その顔容は死人のやうに沈んでゐたが、眼だけは嘲笑的な微笑を浮べてゐた。

種々なる場合に於て、彼は餘程自身の門地の高さを誇つた、そのため自分は痛く感情を害した。然し實際自分は非常に彼に魅せられてあつたのだ、自分はその高慢を彼れ自身の一つの徳とさへ考へた。

コップを手にしてゐる時、彼は好んで女の話をした。

『自然は女——自然の最も誘惑的な餌——でもつて吾々に強固な害毒のある束縛を加

へる。若し肉慾的の誘惑が——それに人類の最も精良な智力が犠牲にされる——なかつたなら人間は恐らくは不朽を得ることが出来るだらう。』と彼が云つた。

同僚のミクハイロは同じ語で、然しもつともつと露骨に、此問題に就て論じてゐた。その爲め自分はこんな意見はいやで堪らなかつた。ミクハイロが女性全體に對して憤怒と惡意とを以て爆發したやうに、教父アントニアスが云つたことは冷かな、あきあきするものゝやうに思はれた。

『俺がお前に讀むためやつた書物を記憶してゐるかね、若しお前がそれを讀んだら、眞に女と云ふものは、どれ位狡猾であり、虚偽であり、不正であるかを知つてゐる筈だ。』と彼は云つた。

自分は、女から生れ、女の乳で育てられた人間が、それ自身の生母に泥土を投げつけ、女の凡ての行動を淫慾に歸して女を貶し、それに依て愛の權化である女を、殘忍な野獸と同一水平面に貶すのを見て驚き且つ嫌惡の念を催した。

自分はその問題について自己の意見を發表した。然し柔い言語で——露骨ではなく。然し彼は大に憤つて叫んだ。

「白痴奴！俺が貴様の母親に就て話してゐると思ふか。」

「女は皆母と云ふことが出来ます。」

「然し多くの女の一生は好色の娼婦だ。」

「この世界には駝背の人が多います、然し人間は悉く駝背にならねばならぬと云ふ法はありますまい。」

「この罰當り奴！馬鹿野郎！」

この男にはまだ役人らしい所が残つてゐた。

〇十四〇

種々な場合に、自分はアントニウスと殆ど撲り合ひをするやうになつた。自分が神

について彼と議論した時、彼の通辭的な嘲笑が自分を憤らし、耐へ切れなくなつた。そして、一夜、今少しの所で、彼に對して自分の憤怒を洩らさうとした。憤怒が自分を苦しめ、そして自分は事物の眞實の性質を發見したいと云ふ熱心な希望をもつて激しく苦しんだ。自分はアントニウスの周圍を徘徊した、飢えた動物が食品店の周圍を徘徊するやうに。そこに慾望が満足されなければ、麵麩の香に刺戟され狂氣になるのであらう？。

議論をやつた夜、彼は諷示に依つて自分を刺戟して怒らした。自分は卓子の上にある短劍を取つて叫んだ。

「直に、事物に關する貴僧の意見を話して下さい、でなければ自分の咽喉を切らねばなりません。どうしても。」

彼は大に驚き、自分の手を捉へ短劍をもぎとつた。自分はこの狂的行動が彼に深い印象を與へたのを見た。

『當然、お前はこの爲に罰を受けなければならぬ。然し狂人の場合には罰しても何の益もない。』

それで彼は自分の頭の中に多くの釘を打ち込むやうに話した。

『さて、俺の云ふことをよく聽け、實際で眞實な只一つの物がある、即ち人間だ。その他のものは凡て意見の問題だ。お前の神は只お前の心靈の夢だ、お前が知り得る凡てはお前自身だ、が、それさへ不完全なものさ。』

自分から何物かを奪ひ取るやうに見えた彼の言葉は、嵐のやうに自分の心靈を壊した。彼は莫迦に長く談した。そして自分は彼の云ふことを理解することもあつたが、理解し得ないこともあつた。自分には彼は悲哀も、歡喜も、恐怖も、傲慢も、苦痛も知らない人に感じられた。此の男は自分には墓所で鎮魂歌を歌ふ老住持のやうに見えた。この言葉は彼の唇からはよく出るが、その心靈とは全く違つてゐる。最初彼の談話には幾分か驚かされてゐたが、後には彼の不信は無害であつたことを知つた。

その不信がなくなつて了つたから。

丁度それは五月であつた。窓が開かれ、花園から香しい夜の氣が室内に花の香を送つてゐた。そして林檎の樹は始めて聖晚餐式に列らうとする途上の若い娘達のやうに、花の美しいお揃の服をつけて盛装してゐた。番人は時を叫んだ、銅板を打つ音は夜の靜肅を破つて反響した。氷のやうな顔の男が自分と相對して坐つて、無益な空虚な語——彼の唇から灰のやうに色あせて溢れた——を發してゐた。自分は大に心を苦しめてゐた、黄金を求めて只安びか物を見ることが出来たから。

『あつちへ行け！』とアントニアスが自分に云つた。

自分は花園に行つた、そして朝の勤行の鐘が響き渡ると同時に、禮拜堂に入り、暗く一隅を選んでそこで瞑想を始めた。

『半死の人間は神に對して何をしなければならぬか。』

僧侶の群が通り過ぎた。彼等は黒い上衣を着てゐるので、月光に碎かれた夜の廢墟

のやうに見えた。彼等は静に進んで行つて禮拜堂で各自の席についた。

その時から、何故か自分は知らないが、アントニウスは自分との談話に、高慢な長者の調子を装ふやうになつた。彼は意地の悪い冷淡な態度でもつて、自分に話し掛け、その座室に自分を呼ぶことを止めた。そして自分に呉れた凡ての書物を取返へすやうに請求して來た。その一つは露西亞の歴史であつた。自分は非常に驚異の念を以てそれを讀んでゐた。然しそれを讀み了ることを許されなかつた。

自分はどうしてこの親切な主人を怒らしたかを考へた、然しその理由を發見すること出来なかつた。が、彼の語は自分の心の奥に粘着いた。そして凡ての他の言葉以上に、凡ての語とは離れて、自分の心中に存在を確定するに至つたものがある。

『神はお前の心靈の夢だ。』と自分は繰返した。そしてその思想に反抗して戦ふべき責任を感じなかつた。實に自分にとつてそれは餘り容易に見えた。

直に彼の情婦がその場に現はれた。それは深更であつた。自分はアントニウスが鈴

を鳴らして呼ぶのを聞いた。

『早く、早く。お茶—』

自分がお茶を持つて行つて、下に置いた時、合せ縫ひの薔薇色の外衣を着た婦人が、長椅子に坐り、その軽やかな髪を肩の上をめちやめちやに亂して、垂れ下げてゐるのを見た。その女は人形のやうに小さく、顔面には臙脂を塗つてゐた。その青い眼は慎重深く嚴肅な容子でもつて自分を見詰めた。

自分は食卓の上にコップとコップ臺を準備した。然しアントニウスを満足さすやうに充分早くすることは六ヶしかつたので彼は叫びつゝけた。

『おさ、おさ、こそげ、早くやれ、早く—』

『さうだ、時々彼はから云ふ興奮の状態にある—』と自分は考へた。

此の戀愛の小喜劇が自分を喜ばした、兎に角、アントニウスは、他のことは何にも出来ないでも、戀愛をすること——確に餘分な知恵を要しない仕事——が出来ること

を證明したから。その時代の自分は婦人に關係してゐるものには氷のやうに冷かであつた。僧侶の敗徳は自分をして嘔吐を催うさせた。そして教父アントニウスは他人にはどう見えても、自分の眼にはどうしても僧侶ではなかつた。

この女は稍々美しかつた。新しい人形のやうに、新装をしてゐた。

翌朝、自分がその室を掃除に行つた時に、アントニウスは不在であつた。實は僧正の所に行つて留守であつた。然し彼女は書物を手にして坐つてゐた。頭髪を亂だし、兩足を組んで、それから只半身丈け着物を纏つてゐた。彼女は自分に名を尋ね、どれ位僧院にゐるかと問ふた。自分はその二つの質問に答へた。

『お前さん此所は苦しくなくつて？』

『否』と自分は答へた。

『若しお前さんの云ふことが眞實とすれば實に不思議だわねえ。』  
『何故、それが眞實でないでせう？』

『お前さんは年も若いし、男振りもいゝから。』

『お前さんは寺院の喩體の外に何も持ちたいとは思はないですか。』

彼女は吹き出して笑つて、長椅子から床に滑り下りるやうにして、その片足を露き出した。それと同時に自分を見てけしからぬ態度をした。彼女は腕を肩の邊までも露き出し、そして衣服の上部を締めることは必要のないことのやうに考へてゐるらしかつた。

『凡てこれは自分の爲には無駄な骨折である。お前は愛人の爲にその愛嬌を取り除けて置いた方がよかつたらうに。』と自分は考へた。

その時この女が云つた。

『お前さんは娘を見て何の情も起らないの？』

『自分はちつとも見ない。』と自分は答へた。『それに何うして娘が自分の情を興奮させせう？』

『どうして、ハア、ハア、』と彼女はくすくすと笑つた。『どうしてお前さんを興奮さすかつて?』

その瞬間にアントニウスが這入つて来て、怒つたらしく云つた。

『どうしたんだー、ジョー! えゝ?』

『オ、』と彼女は叫んだ。『あの青年は餘程滑稽なんですの。』

その時彼女は饒舌り出して、どんなに自分が彼女を悦ばしたかを話した。が、アントニウスは彼女の云ふことには注意を拂はなかつた。然し彼は意他の悪い調子でもつて、自分に、あつちに行つて箱を解くやうに命じ、そして云つた。

『この食糧の一部は僧正の所に持つて行かんけりやならん。』

晝食に彼等兩人はうんと云ふ程食べたなり飲んだりした。その夜、茶の後で、彼女は餘程酩酊してゐた、それと共に彼もまた平常よりは多く飲んだやうであつた。自分は彼處此處に逐ひ廻はされた、これを持つて來いとか、あれを持つて來いとか、酒を温

めて來いと云ふかと思ふと、冷して來いといひ、全て旅館の給仕のやうに、あちこちに走つた。そして夜が更けた時、兩人は段々自分のゐるのを注意しないやうになつた。彼女は暑いとぶつぶつ云つて、だんだん着物を取り除けだした。突然、自分の主人が叫んだ。

『おい、マトヅーこの女は奇麗だらう?』

『さうです!』と自分は答へた。

『此處へ来て、よく見ろ!』

彼女は餘りに飲み過ぎて、どうしても笑を止める譯に行かなかつた。自分は逃げようと思つた。が、アントニウスは自分に叫んだ。

『何處へお前は行く?、ジョー! 彼にお前の裸體をよく見させてやれ!』

自分の耳が自分を欺いたのではないかと考へた。然し彼女は上衣を引き裂いて、よろよろと立ち上つた。自分はアントニウスを見た、して彼も自分を見た、自分の心臓

は若しく動悸がしだした。自分は、つまり生れつき立派な紳士だつた自分の主人を少からず氣毒に思つた。こんな破落戸のするやうな所業は彼には適はしくなかつた。そして自分はその女のために恥かしく感じた。

その時彼は自分に叫んだ。

『貴様出て所け、この豚みたいな百姓め！』

『お前こそ豚だ！』と自分は叫んだ。彼は飛び上つて、幾つも罐の載つてゐた卓子を顛倒へした。陶器は床の上に落ちて微塵に碎け、彼の後方に何にか黒いものが流れ漲つてゐた。自分は花園に行つて横になつてゐた。自分の心臓は凍傷の足のやうに、苦痛を以て惱まされてゐた。凡てのものが皆沈黙の中に包まれてあつた、が、すぐに自分分はアントニアスがその塵室の中で叫ぶのを聞いた。

『出て行け！』

そして女が嘔り泣きながら答へた。

『そんな亂暴をなさるな、馬鹿だはね。』

その後で、自分は車に馬具をつける音を聞いた。そして自分の耳は馬の堪へ難き嘶き聲と、固い土地の上に蹄の喧しく憂々と響くのを聞いた。戸が八釜しく開かれたり閉められたりした。車の輪が輾り出し、園内の門の蝶番が鳴り響いた。教父アントニアスは、

『マトヴ、貴様は何處にゐる？』

と叫びながら、花園を歩き廻つた。

黒い頭巾を被つた丈の高い姿が、徐々と林擒林の中を前へ歩んでゐた。

『痴漢め、……待て！』

そして彼の後に、廣い黒い影が地上に跡を逐つてゐた。

自分は早朝まで花園にゐて、それから教父インドアの所に行つた。

『どうか、自分の旅行券を渡して下さい。』と自分は云つた。『自分は此處を去らうと思

ひます。」

「何故？何處へお前さんは行く積りか。」と彼が尋ねた。

「何處へか、何處からか、自分にも少しも分りません。」

インドアは自分に種々な質問を續けた。

「自分は今、貴僧に云ふことはありません。」と自分は云つた。

自分は彼の庵室から出て、老松の下にある腰掛に坐つた。自分は故意と其所に坐つた、そこは僧院から放逐されたもの、表面上自分一身上のため去るものが、他のものにこの事實を告げ知らず目的で坐つてゐることになつてゐる所であつたから。同僚が側を通つて、自分を尻目に見た。そして彼等の多くは通り過ぐる時、痰を吐いた。

自分とアントニアスの關係は潔白でなかつたと云ふ評判があつたと云ふことを記すことを忘れてゐた。新發意は自分を羨んでゐたが、僧侶は自分の主人を嫉んだ。そして兩者とも自分とアントニアスの上に讒謗を洩らした。

「はあ、はあ、」と自分の同僚が自分の側を通り過ぎる時に云つた。「さあ、彼奴は放逐された、ざまをみる！」

教父アサツツは徹頭徹尾、毒々しい小柄の老人で、僧院内で僧正のため密探の仕事をし、その上に半白痴を装つてゐた。彼は自分に耻づべき讒謗を加へた、そのため遂に自分は餘儀なく彼にこんなやうなことを叫んだ。

「お前さんは自分の邪魔をない方がよからう、でしないと、やつつけてやる！」

此老人は半白痴であつたが、それでも自分の脅迫を理解した。

僧正は自分を呼んで親切に話した。

「自分はお前さんが執務所に行つた方がよからうと云ふ警告をして置いた。さうだらう、自分の云つたことに間違はなかつた。そしてこんなことは何時もあることだ。お前は長者の云ふことを聽かなければならぬ。反抗的な精神を有つてゐるお前さんが、どうして平僧として働くことが出来るか。さてお前さんは残忍にも、最も敬すべき教



父アントニウスを侮辱しねた。」

「彼が貴僧にさう話しましたか。」

「勿論のこと、お前はそれに就て何も云はなかつたではないか。」

「教父は自分に裸體の女を見せたことを話しましたか。」

最も尊敬すべき教父の僧正は、自分の方に向いて十字を切り、そして悪魔か何かのやうに自分を遠ざけたが、信心深き恐怖の中にその手を擴げた時叫んだ。

「お前さんは何を話すか、静にしなさい。一人の婦人！！。お前さんは夢を見たんだ。それはお前さん自身にある罪深き肉慾の結果だ。多分、悪魔の誘惑だらう！。お、！。おやおや、どうして婦人が僧院へ這入ることが出来たか。」

自分は彼の心を鎮めやうとした。

「誰が昨日、貴僧の所へポルト酒や、乾酪や魚の鹽漬を持参しましたか。」  
彼は一層ひどく困つた。

「どうして、お前はそんな無意味なことを話すのか。神、爾を恵ませ給へ！。どうしてお前さんはそんな笑ふべきことを案出するのか。」

十五〇

凡てこれは自分に厭はしきもの、自分を發狂せしむるに足るものであつた。

午頃、自分は湖水を横ぎり、堤の上に坐つて、二ヶ年の長い間自分が非常に骨の折れる荒仕事をした僧院を眺め下した。

僧院の方に當つて青々とした緑の森が翼のやうに擴がつてゐた。繁茂つた簇葉の中から刻目のある白壁、古代寺院の青い圓屋根、人間が神に建てた新寺院の鍍金した圓屋根、赤い斑理ある屋根等が鋭く聳えてゐる。十字架が樂しげに、誘惑するやうに輝いた、その上に天の青玉の鐘が春の愉快な讚美歌を鳴らし、そして太陽はその樂しげな光線の上に雀躍りしてゐた。

心を喜ばす凡てこれ等の美観の中に長い黒衣を着けた人間がゐた。彼等は洞穴や暗い室に蹲まつて不潔な意味のない勞働の中に、愛も楽しみもなく無益に月日を浪費して朽ちてゐた。

自分は彼等の凡てを感んだ、そして自分自身をさへも。自分は泣きたくなり、起ち上つて、そこを去つた。

空氣の香が如何にも薫しかつた。全世界とその上にある凡ての生物は歡び歌つた。太陽は野原にある凡ての花を咲かすやうにした。彼等は曲つた頂飾を天空におげた。緑の若々しい揃の衣を着けた木がつぶやき動いてゐた。鳥は囀り、凡ての造物は愛でもつて燃えてゐた。豐饒な繁茂つてゐる大地は歡樂の餘り酔つてゐた。

自分は一人の農夫に出會つたので、挨拶をした。然し農夫はその挨拶を認めなかつた。それから一人の婦人に出會つたが、彼女は自分を避けるやうにした。自分は是非唯かと話したいと思つた、そして思ふさま親切に話して貰ひたかつた。

自由の初夜を自分は林中で過した。そして天空に眼を向けて眠つた。翌日未明、冷氣に眼を醒まされて前進した、思ふ存分に翼を擴げて完全な人生を味はんとして。歩一歩、自分の行路に、愈々遠くに自分を運んだ、そして自分は遙か彼方の目的地さして走り、そこに達する準備をした。

自分が最初に出會つた人々は疑惑の眼を以て自分を見た、僧侶の黒衣は百姓に忌み厭らはれてあつたから。然しどうもそれを脱ぎ捨てる譯には行かなかつた、自分は僧院の試練僧で各地方の靈地を禮拜するのだと云ふ證明を僧正が裏書しては呉れたが、自分の旅行券は既に時期が経過してあつたから。

そこで自分は祭日に自分のゐた僧院に無數に集ると云つたやうな種類の人民とこれ等の聖地を巡禮した。自分の同僚がこれ等の人民をさも遊惰漢でいもあるやうに、冷淡と敵意を以て取扱ひ、強いて彼等をして僧院内の荒仕事をさすことを企て、あらゆる手段を以て利用し、その上、彼等を侮辱的な態度をもつて取扱つた。自分はこれ等

の浮浪人と少しも交際しなかつた。自分ばやるべき仕事があつたので、彼等に相識にならうとしなかつた。然し自分には目的があつたので、他のものより遙に優れてゐると思つてゐたから。

凡ての街道間道に、此等浮浪の徒が、杖を手に持ち、旅囊を脊に負ひ、急がないが元氣に充ち、頭を下に垂れ、卑い瞑想に吸収まれ、神聖なる自信に充ち、よるよると彷徨つてゐるのを見た。彼等は一緒に泣き、凡てのものを見詰め、黙つて禱つた、そして何か少しの仕事をした。若し清僧と呼ばれるやうな僧侶がゐれば、彼等はその人と話した。それからまた別れて、巡禮の新しい場所に悲しげに足を向るのであつた。こんな工合に、彼等は此處彼處と巡禮して行つた。ある一つの聲で急ぎ立てられるやうに。老いたるもの、若きもの、婦女も子供もみな一緒になつて歩いた、そして街道を行く此等の間断なき巡歴の中に、自分の心は種々に亂れた。

然し自分の心靈の上に何か頼もしく思はず力のあることを感じた。この休みなき卑

しい流浪は、永く不活潑な生活を續けた自分には不思議に思はれた。

それは丁度萬有の母なる大地が、その懐から人間を引き攪り、押し退けて、凜然とした聲で叫んだやうであつた。

『行け、事物の本性を究めよ！』

柔順に思慮深くその道を求むる人は、注意して、探し、凝視め、耳を傾け、そして新にその流浪を始める。全大地は流浪者の足音で反響し、そしてそれが何時も彼等先へ先へと、後から推してゐる。彼等を勵まして、河や、山や、森や、海——奇蹟でも行はれると想像し得るやうな淋しい僧院、自分等の狭苦しい残忍な日常生活よりか、何か他の希望が存在するやうな所へは何處へでも行かすやうにする。

淋しい心靈の黙つた當惑が自分を動かして、漸次人間に近づくやうにした。そして自分は人間が求めつゝあるものを理解し始めた。そこで自分の周囲にあるものが悉く自分と同じやうに、ぐだぐだに弱り、無定見のやうに思はれた。

多くの人々は自分と同じやうに、神を求めた。然し何れに彼等自身を委ぬべきかに  
ついては、自分のやつて来たより以上のことは知らぬ。彼等は自己の要求が命ずる方  
法でもつて、その心靈を亂用して苦んだ。で、彼等は止まる力を失つてゐるから、流  
浪を續けるのであつた。そして風の中にある薄紗のやうに軽く目的なく飛んでゐた。  
多くのものはその懶惰に打勝つことが出来ない。それで永くその後を逐つて行き、  
自らを欺き、そして虚偽によつて生活する。けれども凡てのものを觀察しようと思ふ  
希望に充たされてゐるものが居る。然し何かに興味を持つやうにすると云ふ充分な力  
を持つてゐない。

自分は此等の巡禮者の中に、多くの不用な人間、——極悪の無頼漢、風のやうに人  
の血を貪り、破廉耻極まる遊惰者がゐるのを見た。然し、凡てこれ等は單に神を求める  
人間の不安に囚へられたる群衆の、後に起る塵の雲であつた。  
そしてこの群衆は抵抗し難い力で以て、その後について行くやうに自分を曳いた。

然し彼等の周圍には、河上の海鷗のやうに、人類の中の翼あるあらゆる種類の動物  
が叫びながら、貪慾に飛び廻つた。その醜態が自分を喫驚した。

大分以前、ビエロー・オゼロで、自分は活潑な、立派な服装をした男を見た。中年で  
相當な身分の男らしかつた。

その男は樹蔭に起つてゐた、そしてその周圍にはあらゆる種類の襪、軟膏の塊、  
銅盤等があつた。そして彼は折々叫んだ。

『善男！善女！足を使い過ぎた方、腫物で苦しんでゐる方はやつてお出なさい。癒し  
てあげませう。自分は誓つてゐます。基督のため、無料で癒してあげます。』

ビエロー・オゼロに大祭があつた。巡禮どもが各地から、そこに群り集つて来て、  
その男を取捲いて坐り、各自の足から襪襪を取り除けた。その男はそれ等の人々の腫  
物を洗つて繻帯をし、それから一つの教訓を與へた。

『おゝ、我が同胞、お前さんは如何にも愚かだよ、お前さんの木皮靴は大き過ぎる。』

こんなものでどうして歩けますか。』

然し木皮靴を穿いてゐた男は答へた。

『この靴は施物として貰つたものです。』

『それをお前さんに呉れた人は神を喜ばず仕事をした、けれども、お前さんがそんなものを穿いて歩くのは立派な行爲でなく、全く愚の骨頂だ。そして神はその爲にお前さんを稱讃はしない。』

『こゝに神の思想に精通してゐるやうに見える人がゐる！』と自分は獨言つてゐた。一人の婦人が跛足をひいてやつて來た。

『あゝ、ご婦人！』彼は叫んだ。『お前さんのは只の疣腫でない。お氣毒だが、小さな痘瘡だ、それは傳染性の病氣で、全家族がそのため死ぬと云ふ程の悪性のものだ。』この憐むべき婦人は當惑してゐたが、起ち上つて下を向いて行つて了つた。然しての男は叫んだ。

『此處へお出なさい。聖シリルの名によつて、諸君！』

巡禮共は彼に近寄り、唸りながら、その靴を脱いだ、そして瘡痕を洗滌した後で、こんなやうなことを云つて彼等を退かした。

『神爾を助け玉へ！』

然し自分はその男の立派な相貌が烈しくびくつき、その熟練した手が慄へるのを見た。彼は間もなく施療所を閉ぢて行つて了つた。

夜になつて、一人の僧侶が、ある小舎に自分を案内した。すると、其處に、膏藥を貼つてゐた男がゐるのを見た。自分は彼に近寄つて坐り、囁いた。

『何故、貴方はこんなやうな普通賤民の中に泊りなされるか。お服装から判断すると、もつと適當な旅館がありさうなものでせうか。』

『私は三ヶ月間、賤民中の賤民であることを誓ひました。』と彼は答へた。『そして私の仕事を成し遂ぐると同時に、他の巡禮者と一緒に蚤を養つてやりたいと思つてゐます。』

それでも塵物を見るのは餘りいゝ氣持ではない、然しそれが厭なことであつても、自分は晝夜巡禮者の足を洗つてゐます。神に仕へることは六ヶしいが、神の恩恵についての私の希望は偉大であります。』

自分はそれ以上彼と話すことを望まなかつた。然し同時に眠つたやうな振りをして横になつて考へてゐた。

『つまり、彼は神にそんなに重い犠牲を拂つてはゐない！』

自分は隣の人の下にある枯草が、がさが音のするのを聞いた。彼は立ち上り靜に坐つて祈禱を始めた。最初の間、その祈禱は聴き取れなかつた、然し直に自分はこんなやうなことを私語くのを耳にした。

『お、神聖なるシリル！。私が人類の瘍腫や膿胞を癒す如く、私の瘍腫や膿胞が癒るやうに、罪人なる私の爲に、神にお願下さい。お、凡てを見給ふ神よ！親切に私の苦痛と艱難とを見させ玉へ、全能のお許しを私に與へ給へ、私の生命は全諾の掌中にあ

ります。私が激しい感情の人間であつたことは自ら認めて居ります。然し、全能が私の上に科せられた刑罰は充分だと思ひます。私が犬でもあつてもあるやうに退け玉ふな。さう、全能の人民をして私を斥けさゝぬやうに。私の祈禱を香のやうに、全能の玉座に上らしめ玉へ！』

こゝに、神を醫者を取り違へた人間がゐた。これを聞いて自分は全く厭氣がさした。それで自分は指で耳を覆うて聞かないやうにした。彼は祈禱を了つた後、行李の中から何か食物を取り出し、野猪のやうに音をさして、それを噛み始めた。

自分は此種の多くの人に出會つた。夜になつて彼等は神の前に畏縮するが、然し日中に、彼等は同僚の身體を無慈悲に跨げ超した。彼等は嫌惡のため、神を貶して假面を被らせ、神を細かに刻み、腐せやうとした。

『忘れたまふな、お、神さま！私は非常に高價な犠牲を拂ひました。』  
彼等は最初に、自らの貪慾な盲目の奴隸を自身以上に祀りあげ、それから隠氣な憶

病な心霊の恐るべき偶像の前に跪き、こんな祈禱をした。

『お、神さま！全能の力によつて私を判決したまふな、そして全能の憤怒によりて私を罰し玉ふな。』

彼等は神の間牒、人間の裁判官として、世界をこそく歩き廻り、そして教會の法規のあらゆる犯罪に對して、鋭い注意を拂ひ、憤り、興奮し、すゝり泣きをして、嘔吐した。

『禍なるかな、信仰が人類の中から消え失せて了つた。』

特に一人の巡禮の熱心は自分を喜ばした。自分は彼と共にペレイアスラヴルからロストヴまで行つた。その旅行中彼は叫びつゞけてゐた。

『何處にテオドル・ゼ・ステユデントの神聖な會堂があるか。』

彼は黒鬚の薔薇色い頬の肥えた壯健な男であつた。彼は金を持つてゐたが、それをその夜の間に自分達が泊つた處で婦女に使つて了つた。

『私は神の法律の破壊と人類の缺點を見たその時、』と彼は云つた。『私の心の平安を失ひ、煉瓦製造業を息子に譲り渡し、過去四年間、足の止まる所に種々なものを見物して歩き廻つた。そして眞實の憤怒が私の精神を破壊した。二十日鼠が教會の寶藏に這入り、そして法律の堅固な建築物は彼等の齒牙で破られてゐる。多くの人民は教會に對する憎惡の念を以て充たされ、忌むべき異教の門に靡いて、生れた教會の懐から去つた。そして、神のために戦ふべき義務のある教會は何をして居るか。凡てこんな反對なことをするか。教會はその富を増し、却て敵を多くした。教會は乞徒ラザラスのやうに、貧乏でなければならぬ、それでこそ人民は基督が云つたやうに、貧乏は眞に聖き心の状態で、他人の富を欲しがつて咥くなど云ふことを實際に見るのだ。教會はこの外にどんな使命を持つべきか。教會は人民の上に確とした制規を保たなければならぬ——それは中々六ヶしいことだ。』

かう云ふ宗法家は法律を遵奉すると云ふことを一小瑣事であると明に見た、そして

それに就ての考へを腹藏なく云つた。つまり彼等は鐵面皮にも法律を放棄した。

自分は神聖な山で、一人の商人―各靈地流浪の記事を宗教新聞に載せてゐた有名な巡禮―がその巡禮仲間に、忍耐、謙遜、平和と云ふことを如何なる工合に教へてゐたかを聞いた。

彼は憤つたやうな風で話した。そして涙が頬から流れ落ちた。その懇願と脅迫とを人民は黙つて頭を下げて聽いてゐた。自分はかう云つて彼を遮つた。

『そして不正な極悪の行爲が犯されてあつたとしても、お前さんは忍耐しようと思つて居なさるか。』

『忍耐ですとも、お前さん、忍耐しなくつては』彼は叫んだ。『お前さん絶對の忍耐で以て、忍ばなくてはならん。基督は私共のため、私共の救済のために苦んだ。』

『では、聖ジョン・クリソストムのやうに、その言語を慎まず、國王にさへ、その不正を譴責したやうな殉教者や、教會の教父については、どう考へなさるか。』

これを聞いて彼はもう瘡癩を制へきれなくなり、そして激しく憤つて、地團駄を踏み、自分の方に向いて唸つた。

『何を下らないことを云つてゐるんだい、この狂人奴！その人達は誰の不正を責めたのか。なあに、異端の暴君ではないか！』

『ユードキシア女帝陛下は異教徒であつたか。』と自分は答へた。『そしてイワン四世はどうですか？』

『僕はそんな人達のことを話しては居ない。』と彼は今焼けてゐる建築物を見てゐる人がなすやうに、その手を振り動かして叫んだ。『吾々は皇帝を論ずるのではなく人民に就て論じてゐるのだ。人民が重なるものだ、彼等はあらゆる種類のことに就て瞑想して腦を苦しめ、最早や恐怖と云ふやうなことを知らぬ。彼等は野獸のやうである。そして教會は人民に轡を飲めなければなるまい――それが教會の役目だらう。』

かう云ふ説教者は巧みに話したが、自分はその時に、何故彼等が人民に就て自ら苦



しんでゐるかを理解することが出来なかつた。そして自分は確に彼等の言語から、あ  
る苦しい印象を受けたが、その時それをも理解し得なかつた、自分は盲目であつて、  
人民を見なかつたから。

〇 十六 〇

自分がこの旅行通信員と議論した後で、種々な人がやつて来た。そして自分から何  
も教訓を受けることを期待しないと云つたやうな風に話した。

『こゝに非凡な人がゐるが、お前さん達はあの人と話したくはないか。』

それから、林中の湖畔で夕の勤行の間、彼等は自分と巡禮者の中にゐた一人の青年  
との對面をとり持つた。この男は電光にでも打たれたと想像し得るやうな眞黒い顔容  
の僧侶で、頭髮は極めて短く刈込んでゐた。如何にも厭味のある冷かな氣分の男であ  
つた。その顔は骨と皮ばかりで、二つの褐色の眼が鋭く輝いてゐた。彼は絶えず咳嗽

をして何時も震へてゐた。そして隠し難い敵意を以て自分を見、息を止めて苦しさを  
に話した。

『君は基督教信者の忍耐と謙遜を排斥すると云ふ人を人々から聞いたが、それはどう  
云ふ理由ですか。』

自分はその時何と答へたか想ひ出せない。只その男の疲れ切つた顔と自分に叫んだ  
破れ聲のみを記憶して居る。

『吾々はこの世の生活の爲に此所にゐるのではない、未來の生活の爲だ。天は吾々の  
ホームだ、解つたかい。』

テツケ・タアコマンズ種族との戦役に失脚した跛足の兵卒は、彼の所に行つて怒つて  
云つた。

『諸君！、私の意見では、恐怖が少なければ少ないだけ信仰が愈々厚くなる。』  
そして若い僧侶の方に向いて云つた。

「若し君が死を恐れるなら、それは君自身のみのことで、外のものには全く没交渉だ。然し君はそれで他の人を脅かさうと思つてゐる。君がさう云はなくとも、可い加減隠氣勝ちだ、赤頭奴！もう喋べることをよした方がよからう。」

若い僧侶は直に消え失せて了つた。然し群衆——きつと五十人はゐたに違ひないが——は残つて自分の云ふことに耳を傾けてゐた。自分にはどうして彼等の注意を惹いたかは分らぬ、然し多く聴衆を持つことは自分に愉快であつた。そして高い松樹と沈んが顔をしてゐる人間との間に、夜の影が落ちるまで話した。

その時凡ての顔が自分の方に集つて、一つの非凡な大きな顔になつた。黙つてはゐるが、大膽な思想が潜んでゐて、思切つた疑惑の表情があつた。百の眼の中には自分の心に燃えたやうな消えない火の光を見た。

後になつて、この一つの大きな顔が自分の記憶から消え失せた、然し大分後になつて自分は群衆の意志が、法律の保護者を戦慄せしめ、群衆に對して恐懼を抱かしむる

一つの思想に導かれてあることを理解した。

この思想がまだ發生せず、明瞭に理解されてないにしても、その精神は、それに對な法律の堅固なるか否かに對する疑惑に因て孕まされてゐる。で、法律の擁護者に不安の原因がある。この人々はかう云ふ大膽な疑惑の狀態を見てゐる。そして黙つて進んでゐる民衆を見て、既にその中に新しい思想の隠れた光を感じるのだ。そして法律の擁護者等はその無言の瞑想の隠れた火が自分達の法律を灰とし、その法律よりも他のものが勢力を得ることを感じた。

この法律の擁護者達は、眞夜中に目を覺ました主人の軽い足音を聞き取る盜賊のやうに鋭敏な聴覺を持つて居る。若し一度民衆がその目を醒ましたならば、その生活は忽ち顔を天空に向けて頂點から奈落に變ずることをこの人等は知つて居る。民衆が不和に生活し、分れ分れになつてゐる間、民衆には神がない。生きた神は肉に充ちてゐる人間とどう云ふ關係を有たねばならぬか。

充分に満足してゐる人は、その周圍にある凡てのものが飢えてゐる間に、自分の胃が充ちてゐると云ふ事實を何うかして尤もらしく見えるやうにしようとしてゐる。その人の生活は——寂寥の中に、その人を取捲く恐怖の呪詛の下に——悲劇と喜劇とが一つになつて轉つてゐる。

流浪中に一度、自分は、身長の高い、精選の骨のやうに無垢な白髪の老人が、如何にも變な容子で自分を見てゐるのに氣が注いた。

老人の眼は恐怖に襲はれていもゐるやうに、その凹の中に深く引込んでゐる。彼は若い山羊や徒歩競争者のやうに強健であつたが、何處かに厭味があつた。老人は人を推し退けて群集の中を歩き廻つた。そして丁度知人でも探すやうに、一々群衆の顔を覗いてゐた。そして自分に對して何かを求めゐるやうに見えたが、何も求めなかつた。その内氣な處に自分は同情した。

自分はアタネシアスを訪問する爲に、ライユバンに行かうとした。

この老人は白い順禮杖をついて、自分の後に静について來た。

「老爺さん、どれ位の間、お前さんは流浪したかね。」と自分は尋ねた。

彼は自分の質問を喜び、頭を後方にそらし、柔しく、すくすくと笑つた。

「九年間だよ、九ヶ年間。」

「では、老爺さんは罪惡の重荷を脊負つたに違ひない。」と自分が云つた。

「何處でお前は罪惡の量と重さを發見するかね、只神さまのみが俺の罪惡を知り玉ふのだ。」

「然し老爺さんは心中に何かを持つてゐるやうに見える。」と自分は笑つて云つた。すると、その顔に微笑が現はれた。

「どうしてさうか。」と彼は答へた。「俺は決して本心に何も持つてゐない。——世間並に生活した——トボリスクから遠からぬ西比利亞に生れ、青年時代には御者をし、同時に旅館とバーを有ち、それから店も有つてゐた。」

「老爺さんは何かを盗んだと思はれるよ。」

この老人は叫んだ。

「何故？、神はそれから自分を保護した、お前は何の事を話してゐるかね。」

「自分は只戯談をいつたまで、自分が小父さんを見た時、「あゝ大きな罪を犯したやうに思はれない小さな老人が行く」と獨言つてゐた。」と自分は云つた。

老人は立ち止つて頭を振つた。

「心霊は皆同じ大きさと思ふ。」と彼は云つた。「そして悪魔は凡てそれを愛してゐる。然しお前は死に就てどんな思想を持つてゐるかを話してお呉れ。吾々が夜間泊る時、お前は何時も生——人生に就て話してゐる。然し死に就てはどうか？死は何處にゐる？」

「死は何時も何處かにうろついてゐる。」と自分は云つた。

老人はじやれて自分に指を動かして云つた。

「如何にもさう、それはさうだ。何時でも何處にか、さうだ何時でも。」

「て、それでどう？」

「おゝ全くさう。」

その時彼は爪先で起つて自分の耳に囁いた。

「それには無限の力がある。基督自身もそれを免れることが出来なかつた。「この聖餐杯を消え失しめよ」と基督は云つた。が、在天の父はそれを消え失せさすことを許さなかつた。そして彼自身にもそれが出来なかつた。箴言には「死は來りて幸福ある太陽は滅ぶ」とある。」

この小さな老人は、溪間を流るゝ小川のやうに、間斷なく喋つてゐた。

「死はあらゆるものにつき纏ふ、そして人間は竹馬に乗つて地獄に行くやうなものだ。死の翼の一撃で人間は死ぬ！おゝ神よ、世界はあなたの力によつて造られてゐる、然し若し死が勝利を得たならば、どうして、世界が造られるか。然しいくら聰明であら

伶俐であつても、人間は死が「充分」と云ふまで生きて居るばかりだ。』

老人は笑つた。そして涙がその眼に漲つてゐた。

どんな説明を自分は彼に與へることが出来たか、自分は決して死に就て考へなかつた、そしてそれを考へる時間がなかつた。

老人は跳び上つて髭を震はし、衰へた眼で自分を熟視め、そして胸のポケットに左手を衝き入れ、絶えず周囲をきよときよと眺めてゐた、死が藪から飛び出して来て、その手を捕へて地獄に彼を投げ入れることを豫期してでもゐるやうに。自分は驚いて周囲を見廻はした。周囲のものは皆生きて動いてゐた。大地は泡立つ波濤のやうに、濃い緑色をしてゐた。肉眼で見ることの出来なかつた告天子は天空に喜び歌つてゐた。そして凡てが太陽の方に向つて聲高い歡聲をあげて騒いでゐた。

『どうしてそんな思想が老爺さんに起りましたか？』と自分は偶然に知合になつたこの友人に尋ねた。『老爺さんは餘程身體の工合でも悪かつたんですか。』

『いゝや。』と彼は答へた。『四十七歳になるまでは幸福な平和な生活を送つたのだ、その時妻が死んで俺の義理ある娘が首を吊つて自害した、この二つの事件が同年に起つた。』

『多分、老爺さんがその娘を自害するやうに仕向けたんでせう？』と自分は云つた。

『いゝや。』と彼は答へた。『彼女は不身持からさう云ふことをやつた。俺の方では何と知らないんだ——いや、眞實、俺は知らないんだ。然し若し彼女と實際生活したとしても、俺は寡夫であつた、それはちつとも悪くはないんだ。俺は僧侶ではなかつた、そして彼女は俺には見えず知らずの他人ではなかつた。妻が存命中でも、俺は實際に寡夫のやうなものであつた。四年の長い間、妻は病氣して煖爐を離れなかつた。妻が死んだ時俺は十字をきつて「私が自由になりましたことを感謝いたします」と云つた。俺は再婚しようかとも思つたが、突然にかう考へた——「俺は今相當に正しい生活をしてゐて、萬事平和である、然し俺は何時か死なねばならぬ、なせさうであらう？」と、俺

はその爲に煩悶し萬事を息子に譲つて出掛けた。諸君が旅行してもまさか各自の墓場に巡禮として行きつゝあるとは氣がつかないであらう、周囲のものが悉く美はしく見え、凡てのものが皆諸君に點頭き微笑み、恰も諸君を墓場から曳き去るやうであるから。と俺は考へた。然し凡てのものは全く同じだ。どうしたつて、なるやうにしかなりやしない。」

「老爺さんは實際に心から悲しんでゐるのかね。」と自分は云つた。

「あゝ、俺は甚だ哀れなものだ、言葉で述べ盡すことの出来ない程哀れだ。日中俺は群衆と交り、人々の蔭に陰れるが、それが出来なければ、仲間を見出さうとする。然し、夜間に保護者が附近にない時、誰も吾々を保護するものがなく床に就くことは如何にも恐ろしい。それは恰當吾々が其處にゐるかを見るために手搜りしてあつた黒い手を吾々の胸の上之感ずるやうなものだ。死は猫が二十日鼠に對すると同じやうに吾々の心を弄んでゐる。おゝお前は起ち上つて、自身の周囲を見なさい、そしてその周

圍に横たはつてゐる民衆を見るがよい、然し何時民衆が起上るかを誰が知るか。屢々死は多數の人々を奪つて行つた。俺の村で一家全體を奪ひ去つた、——主人も妻も二人の娘もみな浴室の木炭の煙で窒息して死んで了つたことがある。」

彼の唇は顫へ、微笑するやうに見えた。然し小さな涙がその眼から流れた。

「若し人が突然に、一時間以内に或は一睡の間に死ぬことが出来たにしても、病氣が最初に來て漸々に衰弱さすものだ。」

老爺の顔は皺がより、髪は逆立ち、微毒にでも罹つてゐるやうな顔容であつた。彼は小股で飛び廻つてゐた。兩眼は光輝を失ひ、如何にもやさしく呟いてゐた——半ば、自分に向つて、半ば、獨言のやうに。

「おゝ神よ、私は此世に生存したい、小さな蚊のやうであつても、私を殺し玉ふな。神よ、縦令南京虫や蜘蛛のやうであつても、生き存へしめ玉へ。」

「おゝ、愍然な奴！」と自分は考へた。

路傍の茶屋に憩うてゐる時に、伴侶を見つけると、彼は非常に元氣づいて来る。そして直に、死とこの世界の神に就て話し始めた。「諸君は死ぬ」とは彼が説教の題目であつた。「諸君はいつ何時死ぬかも知れぬ、或はこゝから一里も行かぬ中に雷に打たれて死ぬかも知れぬ。」

これを聽いて滅入り込むものもあつたが、大に怒つて彼を叱責するものもあつた。一人の年若い女が叫んだ。

『お前さんの火薬は爆發しません……、無意味な嘸語を言ひなさるな。』  
彼女が非常に憎々氣にかう云つたので、この老人は死の讚美を、はたと止めて黙つて了つた。

老人はリユーバンに行く道すがら絶えず自分に慰安を與へやうとした、自分が彼とその永久の問題に厭々するやうになるまで。自分はこれと同じく死と愚かな隠れん坊をし、死の手から逃げ出さうとしてゐる多くの人々に出會つた。そして青年の中に、

この老人よりはもつと嫌やな卑怯者があつた。勿論彼等は神を畏敬しない。こんな奴等の精神は燠燠煙突のやうに黒く、恐怖の念は疾風が吹かない時でも、何時も彼等の中に嘯いて居る。彼等の思想は廻國巡禮の老婦と同じだ。そして何處に行きつゝ、あるかも知らないで、地球の表面を駆け廻り、その道に横はる活きたものを盲滅法に踏みつけてゐる。そして絶えず神の名を口にして居るが、その心には神に對する愛を持つてゐない。で、彼等の意志を活動さすことは出来ない。彼等の心を支配する唯一のものは、人類にその死に關する恐怖を傳へんとすることである。それは此等の乞徒が安らかに寝たり食ふたりするためだ。若し人々が彼等に蜜を與へれば、他人の精神に腐敗した彼等自身の害毒を注入するだらう。彼等は破廉耻の乞徒で、全然利己主義者である。恰當、なにかの行列が通り過ぐる時、同情を惹起さしめ、銅貨を得る目的でもつて、負傷や、不恰好な手足を、公衆の面前に曝らす跛者や不具者と全然同じであるのだ。

彼等は精神的不安の有害な種子を廣く撒きながら、この世界を遍歴した。彼等は呻き、それに應ずる他のもの、呻聲を聞きながらつてゐる。すると彼等の周圍に愼深き、神の探究者の一隊が、力強い大波濤をあげた。そして人間の心痛と悲哀とは恰當、萬花鏡を雜色にするのである。

自分はその一例として、小亞細亞の婦人の話を話してみよう。その婦人はこの老人の彈藥が爆發しないと云つて侮辱した。彼女は黙つて齒をしかと喰しめて歩き廻り、その日に焦けた顔は怒つて火のやうになつてゐた。そして憤怒の焰が彼女の眼から電光のやうに閃いた。彼女に質問を試みたら、宛然、懷劍でも刺し通すやうに鋭く答へた。

『そんなに自分に叫びなさんな、ご婦人！』と自分は言つた。『お前さんはその代りに、靴が足を刺すやうな所を自分に話した方がいゝでせう。多分もつと樂になるでせう。』  
『貴方は私を何うしたいと云ふ思召ですか。』

『何でもありません、ご心配には及びませんよ。』

『私は何にも恐くはありません、然し何もかも皆いやなものだらけです。』

『自分に何か氣に食はないことでもあるんですか。』

『貴方は何故私を苦めますか、お助けを願ひたいんですか。』

彼女は凡てのものを斥けた、老ひたるもの、若きもの、婦人までも。

『自分はお前さんの苦痛を知る外に、何の用もないんです。自分は人類を苦めるものを悉く知りたいと思ふんです。』

彼女は屍目に自分を見て云つた。

『悪魔に呪はれて了ひなさい！、他の人もみんな一樣に呪はれるがいゝ！』

『では、どうして自分を咒ふの？』

『私がさうしたいと思ふから。』

彼女は狐付きのやうに思はれた。



「では誰のために、お前さんは神殿で禱つてゐるんです？」と自分が云つた。  
彼女は齒を露出し、相好を崩して笑ひ、歩調を弛めて、自分にではなく、彼女自身に話しかけてゐるかのやうに語り始めた。

「去年の春、私の夫はドニイバアに材木を浮べるために行つたが、それつきり歸つて来なかつた。多分溺死したんでせう。大方他に妻を見つけたんでせう。——誰が知るもんか。私の義父母はひどく貧乏で、運がよくなかつたんです。私には二人の子供がある、一人は男兒、一人は女兒です、どうして私は彼等を養ひ、彼等に着せるてせう。さう、指が骨になるまで働かうと思ひました、が、働かうにも仕事になかつたんです。どうしたら婦人は働らいて金を儲けることが出来るでせう？。義父は云ひました「お前と二人の餓鬼は俺の首玉にくつついてる石だ、お前達は俺共のものを食ふ」と、義母がかう云ひました「お前はまだ若い、僧院に行け、僧侶は好色だから。お前は可成金儲けをすることが出来るよ」……私には子供等が飢餓に瀕してゐるのを見て居る

ことが出来ませんでした。で……私は義母の云ふ通りにして……行つた。それは彼等を溺死さすよりは少しはましだと思ひましたから。」

彼女は夢を見てゐる人のやうに話した。齒を閉ぢて不明瞭に語り出した。そしてその兩眼は母たる悲痛で、苦しめられてあつた。

「小さな男兒は今四歳で、名はオシツアと云ひ、娘の名はハンナと云つて居ます。子供等がパンのため私を苦しめる時、何時も彼等を打ちました。——彼等を打つた、ええ私は打ちました。私はさう云ふことを一ヶ月やつて、四留儲けた。僧侶は吝嗇でした。私は正直な手段で、それ以上の金を儲けることが出来たかも知れませんが、お、悪魔！悪魔！この屈辱を洗ひ浄める水は何處にあるでせう？」

自分は慰藉の方法として何にかを云はなければならなかつた。そこで答へた。  
「神はお前さんを容赦します……お前さんの子供達の爲に。」  
如何にも苦しげに彼女は叫んだ。

『それが私に何の關係があるてせうか。神と關係してゐる間、私は潔白だ。若し神が私を容して下さるなら結構です。然しそれにしても忘れることが出来ません。いや決して出来ないんです。地獄でもそれより悪いことはない。兎に角そこでは私は子供を伴れてゐないでせう？』

『あゝ、何故、自分はこんなになるまで、彼女を興奮させたか。』と考へた。

彼女は張り出づる言葉を止めることが出来なかつた。

『貧乏人には神がない——ない。私共がアムール河地方にあるゼレニコリンに行つた時、前に云つた多數の群衆と一緒にになりました、私共は泣いて禱り救護を求めました。神は私共の救護に出現したでせうか。三年の長い間、私共はそこいらを流浪してゐました。そして熱病のため死なずに生き残つたものは、また乞徒になりました。父はそこで死んで了ひ、母は荷車の車輪で足を壓潰され、二人の兄弟は西比利亞で見えなくなつて了ひました。』

彼女の顔は化石したやうに見えた。その容貌には何處かに嚴かな美しい所があつたが、下卑てゐた。その眼は黒く、髪は濃くあつた。吾々は番小屋の後にある森の縁に坐つて、朝になるまで終夜話した。自分はこの悲惨な女の心が焼き盡されて燃え屑となり、その子供の時代を語る時のみに泣くことが出来たのに氣が注いだ。彼女は思はず二回微笑した、そしてその兩眼は柔しい光で輝いてゐた。

彼女が話してゐた間、自分は考へた。

『彼女は人殺をしようと待ち構へて居る、自分が自殺する前にきつと誰かを殺すであらう、若しそれをしなかつたら、闇黒社會の賣笑婦になるだらう。彼女にはその外に方法がないのだ。』

『私は神を見ない、隣人を愛さない。お互に助け合ふことの出来ないとは、どう云ふ種類の人間でせう？ かう云ふものを人間と云ふのでせうか。強者と比較すれば、此の種の人間は小羊ですが、弱者と關係しては狼です。然し狼でも群を造つて共同生活を』

します、それに人間は各自一個人のために生活し、お互に敵視してゐます。お、私は多くのものを見且つ苦しみました。凡ての人間が滅亡したらよからう！此の世界に子供を生み出して、それを養ひ育てることを知らない、それでよいでせうか、私は子供が麵麩を求めた時に、打ちました、——彼等を打ちました。』  
彼女は夜が明けて僧侶と商賣をするため、自分に別れて行つた。然しそこを去る前に自分を罵つてこんなことを云つた。

『お前さんに何の悪いことがあるか、私共は一緒に一夜をあかした。……お前さんは私より強い。何故お前さんは機會を利用しなかつたか、何にも金錢のかゝることでもないに。え、お前さんは馬鹿だよ！』

自分は恰當彼女に平手で打たれたやうに感じた。

『お前さんはそんなことを云つて自分を罵る權利はないんだ。』と自分は答へた。彼女は顔を覺めて言ひ續けた。

『私は何でもかでも罵らなければ氣が済まない、よし私に害をしなくても。お前さんは疲れ切つてゐてもまだ若いでせう。お前さんの顛顛の周圍は灰色ね、お前さん自身の重荷に苦しんでゐることを充分に認めて居ます。然しそれは私に何の關係もないことです。私は何んなものにも同情を持ちません、さよなら。』  
そして彼女は行つて了つた。

十七

遍歴六年の間に、自分は悲哀と苦痛に悩んでゐる多くの人々を見た。消えざる憎悪がその眼に輝き、彼等は何處に行つても只害毒を見るばかりである。その人等は害毒を見、恰當温い浴槽の中のやうに、その中に入浸つてゐる。そして飲酒家が焼酎を飲むやうに、害毒を飲み、勝ち誇つて冷笑してゐる。

『吾々は正しい、悪は凡てのものを支配してゐる——凡ては悪であり不幸である。』

此等の人々は極端な失望に陥り、それに激して種々の悪徳を犯し、その悪徳を生じた爲に、復讐でもするかのやうに、種々な方法でこの世界を汚した。そして彼等は自身の弱點の奴隸として、死が追捕するまで世界の大道を徐々と歩んでゐる。

この人々は神の玉座の高さまでその苦痛をもちあげ、神前に平伏し、自身の化膿性瘍腫の外に何ももの見ず、自身の失望の慟哭の外に何にも聞かぬ。

この人々は非常に狂亂して見えるので、同情するものもある。然しその状態は見るものを刺戟して厭やな氣持にする、それは凡ての人の顔に害毒を吐きかけ、出来るなら、それで太陽までも汚したいと思つてゐるから。

この外にまた悲痛に刺戟され、脅迫され、哭きもしないが、小さな悲惨な存在を埋めやうと努力して、而もそれが出来ないで、恰當古代の城塞の壁にある穴を埋める土のやうに、この世界の強者の奴隸になるものがある。

多くの人々と言語とは自分の記憶に刻み込まれてあつた。多くの人々の溢るゝ涙が自

分の前に流された。屢々失望の笑が鳴り響き、自分の耳を聳にした。自分はあらゆる害毒を味ひ、多くの河川の水を飲み、屢々自分の弱さに慟哭した。

人生は、恐るべき夢魔、亂れたる想像の繪のやうに、旋轉する言葉の紛亂、沸騰する涙の雨、失望による永久の叫喚、理解することの出来ない苦悶の中に、激しい不安な氣持で、骨を折る全世界の苦しい震動のやうに、自分の前に現はれた。

そして聲高い呻吟が、自分の心臓から出た。

『いやいや、それはさうでない、さう云ふ筈がな』

悲嘆の瀧が世界のあらゆる公道私路に暗流をなして漲つてゐた。そして自分は突然な恐怖を以て、凡てのもの、混雜した闘争の中に、神のために残された所もなく、何處にも神の力があらはれず、神の足の休所がないのを見た。人生は、悲哀と恐怖、惡意と失望、貪慾と破廉恥の毒に食ひ盡され、微塵に打ち碎かれてあつた。人類を結合する凡ての羈絆は弛んで了つた。各自孤立して頼りなく、各自思ひ思ひの道を漂泊つ

てゐる。その時自分は獨言つた。

『神は實に人間の精神の夢に過ぎないものだ。——救ひ難き暗黒の時に失望から生れた一つの希望に過ぎない。』

自分は人々が各自に特別の神を有つて居り、これ等の神がその崇拜者よりも一層高い階級に居ないことを見た。この事實は自分の氣持を悲しくした。人間は神を求めないが、只各自の悲哀を忘れようとしてゐる。この悲哀は凡ての方面から人間を苦しめる。人間は彼れ自身から逃げ、如何なる種類の行動も避け、人生に與ることを恐れ、静かな隠れ場所を求めてゐる。そして自分は、人間を動かすものは、神を求むるもの、聖き不安ではなく、單に生に對する恐怖に過ぎないと思ふ——つまり神の中に法悦を逐ひ求むるのではないが、只その不幸を免れんとする無益な心配である。

その時自分の心臓は今一度叫び出した。

『さや、さや、さうではない、眞實の筈がない。』

そして自分は眞面目な瞑想に没頭してゐる人を見た。その眼からは、純潔な美しい焰が輝いてゐた。自分は一兩度、かう云ふ状態の男に出會つた、然し三四回目にはひどく激して憤つてゐたか、酒に酔はらつてゐたかであつた。その謹慎な謙遜な態度は全く消え失せて了つて、野卑と傲慢で神を瀆してゐた。

自分は何ものが彼の沈着を亂だし、その全實在を變ぜしめたかを知らなかつた。凡ての人間は盲人のやうに、歩む時少しは躓く。稀に吾々は感激するやうな活々した言葉や耳にする。亦屢々人々は悪い習慣で、外國語を反覆し過ぎる、その中にある思想の價値如何と云ふやうなことは理解しない。

諸君は敬虔な僧侶の説教、隱士、行者の豫言を集め、丁度子供が壞れた船の破片を以てするやうに、それを諸君自身の中に配列してゐる。最後に自分は一人の人間をも見なかつた。只荒んだ人生の廢墟、地上に浮び、風のままに教會の入口に吹き飛ばされてゐる汚れた人間の塵のみを見た。

無数の群集が聖徒の遺物、奇異な繪の周圍に集り、聖き泉に浴して、到る處に忘我を求めてゐるのである。

この行列は自分には苦しい光景であつた。自分は子供の時でさへ奇蹟の繪などを見ても何の影響も受けなかつた。僧院生活はその不可思議な力に對し、絶對に自分の信仰を破壊して了つた。自分は如何に醜惡な灰色の虫の如き人間の群が、大道の塵埃の中に這ひ廻はり、未知の力によつて急立てられるかを見た。そして此等の人間が興奮してお互にこんなことを叫んでゐるのを聞いた。

『進め、早く行け！』

人々の頭を土地に垂れさす聖像が、其等の人の上に黄色の鳥のやうに、空高く翔んでゐた。そして彼等には悉くその荷物が重過ぎるかのやうに見えた。

群集の足下にある塵埃と泥土の中に、生きた球の如く、魅せられたやうに見える男女が倒れて、砂上の魚のやうに悶え苦しみ足掻いてゐた。荒々しい叫び聲が起り、他

の者は動悸打つ身體を踏みつけ、彼等を踏み倒し、或は跪り飛ばして、聖母の繪像に叫んだ。

『喜び玉へ、おゝ、天の女王！』

凡ての頭が汗で浸され、塵で汚され、歪み荒んで狂氣染みた容貌であつた。人間のこの行列の全部、疲れ切つた聲の樂しからぬ歌、このだるい足音は、土地を侮辱し、天の顔を暗黒にした。

道路の兩側にある並木の下に、二つの斑色のリボンのやうに、乞徒の行列が息うてゐた。そこに病人、不具者、跛者、盲者、瘡掻が寝たり起きたりしてゐた。その疲れ切つた身體は地上に足掻き、その不具な手足が空に戦き慄へて、哀憐を刺戟するやうに擴げてゐた。そこに乞徒の群が泣いたり唸つたりして、その傷を太陽に焦がし、凡て神の名によりて金を強請つてゐた。それ等の多くは盲目であつたが、中には眼が燃えてゐる石炭のやうに輝いてゐるものもあつた。苦痛が彼等の肉と骨とに絶えず噛みつい

た。そして多くのものにはある不潔な恐ろしい噴出物の痕跡があつた。

自分はこの等の人達が烈しい追求に苦しめられるのを見た、それから塵埃と泥土の中に彼等を逐立てる力が、自分には毒々しげに見えた。それはどうしてか。

『いゝえ、それは眞實でない、さう云ふ筈がない！』

キイフと云ふ不思議な町に行つた時、自分はそこにある古露西亞の高塔の壯美に驚歎させられた。

そこで自分は賢いと云ふ評判の僧侶と眞面目な會話を試みた。

自分は特に彼にかう云ふことを云つた。『自分は吾々人類社會が依頼する法律を理解することが出来ません。』

『お前さんは何者だ？』

『百姓です。』

『お前は読み書きが出来るか。』

『やつと少し許り。』

『お前には充分読み書きは出来ないか。』と彼は嚴かに云つた。

彼が非常に聰明であつたことを、その言葉から推測した。

『お前はスタンティスト教徒か。』彼が自分に云つた。

『S. S.』

『ほゝーではお前はダックポア教徒か。』

『何故ですか。』

『お前の意見から考へて見て、お前はその一人ではないかと疑つた。』

その顔は櫻のやうに紅く、その眼は非常に小さかつた。

『若しお前さんが神を求めてゐるなら、』と彼は言つた。『確にお前さんの目的は只塵埃の中に神を踏みつけるに過ぎないのだ。』

僧侶は自分の方に指を振つて云つた。

『お前の云ふことは分つた。然し宗教裁判所の判決例を百回目に、誦誦し得るものとして、まあそれをやつて御覽、さうすればお前の痴言は煙のやうに消え失せて了ふ。お前のやうな異端者はアビシニアか、エシオピアに送られなければならぬ、そこへ行けばお前は直に焼殺されて了ふだらう。』  
自分は彼に云つた。

『では、貴僧はそこに——アビシニアに行かれたことがありますか。』  
『さうだ。』と彼は答へた。

その僧侶は怒つて眞赤になつた。

ドニバア河で、自分は神聖なラヴラの向ふ堤に坐つて河に石を投げてゐる人に出會つた。彼はかれこれ五十歳ばかりで、髯の長い、禿げた大きな頭の、圓い顔の男であつた。その時その人の眼の表情によつて、一瞥して、思想家なることを認められた。自分は起ち上つて彼の側に坐つた。

夕方であつた、ドニバア河にはどろどろと濁流が流れてゐた。その後方に種々な色の寺院で飾られた小丘が聳えてゐた、寺院の圓屋根の華美な鍍金が日光にきらきらと輝き、十字架が火花を散らし、寺院の窓は寶石のやうに光つてゐた。それは恰当地球が胞を露き出し、傲慢な寛量を以て、その寶物を日光に晒してゐるかのやうであつた。やさしく、悲劇的な調子で、自分の側にゐる人が云つた。

『ラヴラの全部が鎖され、僧侶は逐ひ出され、何人も入ることを許されてなかつた。かゝる壯美の境に入込む價値あるものは現在ないんです。』

この河の向ふ側にある僧院は、ある偉い賢者によつて話された神仙談のやうであつた。ドニバアの波は遠方から、そこを急がしく通り過ぎ、その光景を見て喜び火花を散らしてゐた。然し此の河流の驚くべき騷擾も人間の弱い聲をうち消すことは出来なかつた。

『如何にも強く計劃し、如何にも強く實行した！』



その時自分はずつと前に夢に見た顔のやうに、ヴラディイミール公、教會の君主、アントニイとテオトシアス、其他凡て露西亞の英雄に就て考へた。そして深い同情が自分の心に忍び入つた。

向側の堤にある無數の鐘が聲高く樂しげに鳴つてゐた。が、自分の心には、人生について悲劇的な思想が一層聲高く鳴り響いた。

吾々の中には一人として人間の起原を考へるものがない。自分は、どうかと云ふと、眞實の信仰を求めてゐた、そして今自分は人間と云ふものが眞に存在してゐる所を自ら求めて居る。自分は人間を見ない。勿論、自分は軍人、百姓、官吏、僧侶、商人を知つてゐる。——然し忌憚なく云ふと、自分はこの世界の事物と結合しない正味の間を見ることが出来ぬ。凡てのものが、皆何か他のもの、奴隷で、他のものから、命令を受けてゐる。頭には頭がある。上には上がある。それで、一つのものが他のもの、上に高く聳え、遂に凡てのものが達し得ない高さまで行つて、眼から消え失せる。そ

して其處に神が隠れてゐる。

夜が餘程更けた。河の水が青色になり、寺院の十字架がその光輝を失つた。まだ堤に居る人は水中に小石を投げてゐたが、最早やその渦は見えなかつた。

「三年前」とこの男は言つた。「俺のゐるマイコバの町で、突然家畜に疫病が起つたため、騒動が始つた。軍隊が派遣され、基督教信者が牛のために基督教信者に殺された。多數の人民が死んだ。その時俺は自ら考へた。若し牛のためにお互に殺し合ふとすれば、吾々露西亞人は果してどんな信仰を持つてゐるだらうか。神が「爾曹殺す勿れ」と云つたのに。」

ラヴラは漸々暗中に消えた。幻の如く、それは山中に隠れてもしたやうに。河畔のコサツク人は頻りに砂を引掻いて小石を探してゐた。一つを見つけ出すと、河中にそれを投り込むので、小石によつて起る水音がをり／＼耳にはいつた。

「それはかうだ、君。」とコサツク人が首を垂れて云つた。「神の掟は心靈上の乳であ

るが、吾々はその泡沫を得るのみだ。「心の潔きものは神を見る」と聖書にあるが、君が自分の意志に従つて生活しなければ、どうして君の心は潔いと云ひ得るか、然し若し君に自由意志がなければ、君の信仰は眞實のものでなく、無益なる虚構に過ぎないんだ。」

彼は立ち上り振り拂つて自身の周囲を見た。如何にも強壯らしい男であつた。

「吾々は思ふやうに充分神に仕へることが出来ない。俺の云ふ意味はそれだ。」

彼は帽子を上に掲げて動かして行つたが、自分は丁度土地に根を下したやうに後に残つてゐた。自分はコサツク人の言葉を理解しようとしたが失敗した。でもその中に意味があることを感じた。

暗い南方の夜が自分を抱愛した。そして自分は坐つて考へた――

「人間心靈の美は只夢想のみにあるのではない。何處に人間の衝動の渦巻を決定する斧があるか。何處に騷擾と混亂の深い意味があるか。」

自分は何時南方で冬を過ぎさうとした。南方は實際暖かであつた。そして若し北方で雪が降つたり寒さが強かつたりすれば、何時も僧院に這入ることにしてゐた。最初僧侶は自分を尻目に見てゐたが、自分がどんな仕事でもやり遂げるのを見て、餘程打解けて來た。彼等は勤勉に働いて賃金を求めないやうな人間を好くのだ。自分の足は手と腦が働く間休んだ。自分は過ぐる夏経験した凡そを茲にまた繰返すのであつた。して過去の経験の中から、精神に眞實の滋養を與へたものを抜き出さうと努力した。自分は吟味をし、解剖を試み、事物の目的を理解しようとしたので、屢々泣きたくなる程、そのために惱まされた。

自分は人類の悲哀と呻吟に飽いた。自分の精神に豪膽な所が消え失せて、陰鬱になり、寡黙になり、凡ての人、凡ての事物を罵つた。折々深い幽鬱に壓迫され、全一週間といふもの、うすぼんやりした人間か盲者のやうに何物にも目も心も向けず只歩き廻つた。自分は放浪生活を止め、普通人のやうに生活することに就て屢々考へた。そ

してかう云ふやうな謎には苦しめられないが、その代り、既に定められた事物の秩序に従ふことに就て考へた。自分は晝間も夜間と同じやうに暗黒で、宛然月が天空にわらやうに地上に淋しく生活してゐた。たい光を放たなかつた丈の遠ひてあつた。折折自分自身から逃げ出したやうになつて、心の中で云つた。

『四辻に勇敢な青年が起つて居る。その人は實際に誰をも知らぬ。何も彼を喜ばすものがない。何もものを信じない。何の爲に生活してゐるか、何故に彼は世界から切り離されて漂浪いてゐるのか。』  
そして自分の心靈は冷かに痲痺してゐた。

〇十八〇

自分はまたよく尼寺で一週間乃至二週間休んだものだ。ウオルガア河畔にある尼寺であつた、自分は木を伐る時足を怪我した。親切な年老た教母セオクリテイスタは自

分を介抱して呉れた。この尼寺は小さいが、金があつて、尼僧達には尊嚴な風があり、有福な生活をしてゐた。彼等のあまつたるい態度、媚びるやうな微笑、太い腹は自分を刺戟する原因となつた。

一夜、自分が夕の勤行の手傳をしてゐた時、唱歌尼が神々しく歌つてゐるのを聞いた。この尼は顔の澤々とした身長の高い娘で、黒い兩眼には敏速な表情を持つてゐた。その唇は充分赤く音聲が澄み切つて、音域が太かつた。何かを求めてゐるやうに歌つてゐた。その聲には怒つて泣いてゐるやうな所があつた。自分の足は殆ど癒えて再び仕事をすることが出来るやうになつたので、今一度漂浪し始めようとしてゐた。一日、自分が尼寺の庭園にある通路から雪を取除けてゐた時、今云つた尼僧に出會つた。彼女は感覺を失つてでもゐるかのやうに、靜かに自分の側を通りかゝつた。彼女は右の手に念珠を持ち、胸を抑へ左の手を脇腹に弛くあてゝゐた。そして唇を噛み、青白い顔をして眉を擡めてゐた。自分はこの尼僧に丁寧な挨拶した、すると急いで頭を上げ、

自分が何時か彼女に大きな苦痛でも引起さしたとでもあるかのやうな容子を見せた。これが自分を苦しめた。特に自分はこの若い尼僧に何等の害を加へなかつたから。「あゝ、庵主さん、こゝに生活することは容易でないと思ひます。」と自分は云つた。尼僧は立止つて、怒つて言つた。

「何と被仰まして？」

「自我に打ち勝つことは難しいと思ふと云ひました。」

尼僧は唐突に低い怒つた聲で云つた。

「まあ、貴方は悪魔の化身！」

尼僧は走り去り、その黒い影は嵐に逐はれる雲のやうに消え去つた。

自分がどうして彼女にそんなことを云ふ氣分になつたかは自身にも解らぬ。然しこんな思想は屢々その頃自分の頭腦の中に入り、最初の通行人の眼中に火花のやうに飛び込んだのである。自分には、凡てのものが虚言者で虚偽者であるやうに見えた。

暫らく経つてから、自分は他の所で再びその尼僧に出會つた。その時、自分は尙一層の苦しさを感じた。「何故、彼女は黒衣などをつけてゐるのか」と考へた。そして彼女が自分の側を通り過ぐる時云つた。

「あなたは此處を逃げたいのですか。」

その尼僧は驚いて、頭を後方にそらし、投鎗のやうに真直に立ち止つた。自分は彼女が決闘を挑まんとしてでもゐるやうに感じた。然し彼女は意外な返答を残して通り過ぎた。

「私は今晚、貴方とお話しませう。」

自分は只呆然たるのみであつた、最初は自分の耳が自分を欺いたのではないかと考へた。言葉は充分穩に云つたが、然し鈴の音のやうに、明に自分の耳に鳴り響いた。自分が翻弄されてゐると知りながらも、なほその言葉に興奮されざるを得なかつた。然し彼女が大膽に戯言つてゐるものと考へて心を平静にした。

自分が足を怪我した時、尼等は自分に病室の一隅をあてがつて呉れた。それは楷子段の下にある小さな室で、その後も自分は其處を占領してゐた。

その晩、自分は寢室に這入つて、放浪生活を止めて何處かの町に行つてヤン焼きの職業を始めることに就て考へて見た。尼僧のことに就てはもう考へようとは思つてゐなかつた。

突然、室の前に、やさしい足音がしたので、自分は飛上つて室の戸を開けた。一人の老婦が自分に會釋して言つた。

『どうか私に伴つて来て下さい。』

自分は老婦が何處に連れて行くかは氣にも留めず、尋ねもしなかつた。然し行く時に考へた。

『それは冗談ではあるまいか。さてさて、一つ驚かしてやらうかな。』  
種々な廊下を通つて、吾々は遂に目的の所に達した。老婦が戸を開けて自分を推し

入れて囁いた。

『あとでまた貴方をつれに來ます。』

マッチが摺られ、眞暗の中に、熟知の顔が見えた。

こんなことを云ふのが聞えた。

『戸を閉めて頂戴！』

自分は戸を閉めて、それから暖爐の方に手探り行つて、それに凭りかゝつて云つた。

『何か燈火を點けて呉れないですか。』

この少女はやさしく、くすくすと笑つた。

『どんな燈火なんですか。』

『お、この娼婦奴！』と自分は考へた。

自分は一語も言はなかつた、彼女は殆ど見えなかつた。——彼女は全く暗い眞夜中の空にある險惡な雲のやうに、眞暗黒の中に居つた。

「何故、貴方は黙つていらつしやるの？」と彼女が尋ねた。その聲は傲慢な調子であつた。

「この女は金持ちに違ひない。」と自分は考へながら云つた。

「お前さんこそ話したら可いてせう。」

「貴方が逃げると云はれたのは本氣なんてせうか。」

自分は彼女に鋭く返答しようと思つたが、少時考へた。それから緩りと靜かに、然も輕蔑するやうな調子で話した。

「なわに、自分は只お前さんの貞操を試めさうと思つた丈けさ。」

彼女はまた黃鱗マツチを摺つた。その顔には紅を潮し、その目は自分の方に向つて、無遠慮に輝いてゐた。自分は何だか耻しい感じがした。自分の目は漸々と闇黒に慣れて來た。自分は彼女が室の中央に反り返つて、不思議に嚴格な態度で起つて居るのを見た。

「なにも私の貞操を試めす必要はありませんまい。」と彼女は熱烈に囁いた。「私はさう云ふことのために貴方を呼びにはやりませんでした。然し若し貴方が私の心を理解することが出来なければ、あちらに行つてお了ひになつた方がいゝてせう！」

その聲には何處にか冷酷なところがあつて、肉慾的ではなく、ある眞面目な響があつた。自分の向ふ側の壁に窓があつた。それは宛然眞闇黒の中を剝抜いたやうに見えるた。それがいやに氣持を悪くした。何だか窀に陥れられたやうに漸々不快になつた。

「私は何處へも逃げ出すことが出来ませんの。叔父のために此處に推込められたのです。もう此處を去ることが出来ませんの。一層首でも縊りませうよ。」

彼女はふつたり話をやめた、恰當石切場へ轉びでもしたやうに。

自分は全く驚かされて、何ともすることが出来なかつた。彼女は自分の方に漸々近寄つて、息を切らしてゐた。

「ではお前さんはどうすればいゝの？」と自分は云つた。

彼女は自分にずっと近寄り、肩に手をかけた。それが甚だしく戦へて居るのを感じた。と同時に、自分も亦總身が震へて膝が崩れた。暗黒にひどく壓迫されたので、自分には息切れがした。

『どうも、この少女は何かにとりつかれてゐる！』と自分は考へた。

然し、彼女は歎歎りをして、自分の顔に熱い息を吹きかけて囁いた。

『私には可愛い赤坊がありました。みんなのものがその子をもぎ取つて、私を此處へ推込めて了つたのです。ですから私は此處で辛抱がし切れないんですよ、どうしても出来ません。彼等は子供は死んだといつて居ります、私の叔父——私の後見者——も叔母もさう云ふんです。が、多分彼等は私の子供を殺したか、捨てたかしたんだせう。察して下さいな貴方。私は二年すれば成年になりますが、それまで彼等の束縛を受けなければなりません、然し私は此處に居ることは到底出来ませんの。』

彼女は凡て此等を心底から眞直ぐに云つた。そして自分は誤解してゐたことを感じ

た。それで彼女に同情したが、と同時に恐くなつた。何だか半狂人に見えたから。そして彼女の云ふことを信ずべきか否かに迷つた。

然し彼女は泣きながら呟いてゐた。

『私は子供が欲しいんです。若し私に子供が出来れば、此處から逐ひ出されませう。私は自分自身の赤坊が欲しい。若し私の最初の子供が死んだとしても、今一人ゐる譯です。ですから、眞逆それまでも振ぎ取るやうなことはありますまい。私の心霊を盗みはしないでせう。私は貴方の同情をお願いします。貴方の力でお助け下さつて取られてあつたものを取返して下さいな。どうか、私が良母であつて決して娼婦でないことを信じて下さいな。罪惡ではありません、私の望むものは息子です。肉慾の満足でなく子供です。』

自分は夢中にあるものゝやうであつた。自分は彼女を信じた。一人の女が決然起つて、自己の権利を辨護し、知らぬ人を呼んで助けを求める時に、自分はどうしてそれ

を疑ふ餘地があるか。

『私は母たることを禁ぜられてあります、助けて下さい。』

その時自分はまだ見たことのない、自分の母のことを考へた。多分自分の母も女らしい力でもつて、自分の父の力を奪ひ取つたのだ。自分は彼女を抱擁して云つた。

『お前さんを悪魔と思つたことを許して下さい。聖母の名によつて許して下さい。』  
それでも、まだ彼女が自分の腕にある間てさへ、こんな狡猾な者が自分の心に閃いた。

『若しこの女が自分を騙して、他の者とも同じやうなことを演つたら、どうだらう？』  
彼女は自分に身上話をした。彼女は鑛鍛冶屋の娘で、その叔父は火夫で、泥酔漢の野卑な人間であつた。叔父は夏になると汽船に雇はれ、冬になると港で仕事をしてゐた。そして彼女は家なしの流浪者であつた。その父と母とは、乗つてゐた船が火災にかゝつてヴォルガ河に溺死した。その時まだ十三歳の少女であつた。そして十七歳

の時、ある貴族の若君と關係して一人の息子を産んだ。

彼女のやさしい聲が自分の精神全體に溢れるやうであつた。自分の首の周圍に、彼女の温かな手を感じ、その頭が自分の肩の上に乗つかつてゐた。さう云ふ物語を聞いた時、疑惑の悪い蛇が自分を喰ひ盡した。

吾々は、人類のために基督を生み自ら謙遜して、それをゴルゴタに伴つて行つたのは女であつたことを忘れてゐた。吾々は又この婦女は凡ての聖徒の母であり、過去に於ける凡ての偉人の生母であることをも忘れてゐた。そして吾々は卑しむべき劣情でもつて、婦人の價値に關する凡ての意義を忘れ、吾々の娯樂の對象物とし、勞働を課する家庭の動物の列にまで貶したことを忘れてゐた。そのため、女は最早や如何なる救世主も生まない、只子供の代りに不幸な異形體のものを生むのみである。

彼女はこの尼寺のことを物語つた。そして自分はこの女ばかりがその意志に反して此處に監禁されてゐるのではないことを知つた。その時突然彼女は自分を抱きしめて



云つた。

「私にはこゝに愛すべき少女の友達がありますの。純潔な處女で、金持ちの家に生れたのです。それで、彼女がどんなに悲しんでゐるかを知つてゐて下すつたら。彼女はまた一人の子供を生みたいと思ふてせう。子供を生めばまた放逐されて、教母に行くでせうから。」

「おゝ神！ 今一人の不幸な女！」と自分は考へた。

そしてまた神の崇高な智識と正義、神の掟の公平に關する自分の信仰の今一つの片割が粉碎されて了つた。誰にしても單にその法律の勝利を思ふならば、どうしてそんな亂暴なことを働くことが出来ようか。

そしてクリスチナは自分の耳にやさしく囁いた。

「私は貴方に、今云つた友達を紹介しませうか。」

この言葉を聞いて、自分は彼女に悪いことをしたと熟々思つた。そして彼女に謝ら

なければならなかつた。自分は、正しく女性の尊嚴を有する純潔な處女のみが、さう云ふことを話し得るものと思つた。彼女を疑つたことを自白すると、彼女は自分を推し退けて暗黒で泣いた。然し自分は慰めてやる氣になれなかつた。

「貴方は私がこゝへお招びしたことを耻ぢてゐるとお考へになりませんか。」と彼女は責めるやうに云つた。

「貴方は、この健康と美貌を有つてゐる私が、慈善を願ふやうに、男子の方に愛を求めらるのを一小瑣事とお考へになりますか。何故、私は貴方を信用しましたか。貴方は苛酷な相貌をした、口數もさかず、若い尼達に目も呉れない眞面目な人と思ひましたの。貴方の顯顯の周圍には少し白髪が混つてゐます。それに、私には何故かと精密に言ふことは出来ませんが、貴方は善良な性質のお方に見えました。それで、初めてお目にかつた時、あまり不親切に話されたので、眞實私は泣きました。私は自分を欺いたと考へました。で、遂に決心して、貴方をお招びしましたの。」

「許して下さい。」と自分は云つた。

彼女は自分に接吻した。

「神は貴方をお許しになりませう。」

老婦が戸を打つて囁いた。

「あなた方はもうお分れなさいましな、朝の勤行の鐘がもう直に鳴りますよ。」

彼女が自分を送る時に、かう云つた。

「貴方、一留だけ頂きたいものですが。」

自分は彼女を殴り倒してやりたかつた。

それでも五日間、クリスチナと生活した。自分はもうそれ以上永く彼女とゐることが出来なかつた。唱歌女と新參の尼達が非常に自分を苦しめ、それに自分はこの新しい経験を一人で回想する必要を感じたから。若しそれが女性の希望であつたら、どうして人々は女に母となることを禁じ得るか。子供はこれまで何時も新しい存在の起原、

新しい力の傳達者であり、また今後もさうではなからうか。

自分は直にこの尼寺を去るべき他の理由が出来た。つまり、クリスチナが自分に一人の友達を紹介した。——美しい纖弱い、青い眼の女で、自分の亡妻オルガにそっくりであつた。彼女の顔には純潔な表情があり、同時に深い陰鬱な風采があつて、強く自分を惹きつけた。それにクリスチナは出来るだけ、自分の心を引立てるやうにしてゐた。然しその場合は異つてゐた、クリスチナは處女でないのに、ジュリア——クリスチナが紹介した少女——は全く純潔であつたから。そこで自分の考へでは、ジュリアには配偶者たるべき男がなければならぬ。それに自分は、自分自身に信用がなく、自分自身の性質も分らなかつた。

自分はクリスチナに別れた。彼女は數滴の涙をこぼし、そして手紙を呉れるやうにと求めた。若し彼女が妊娠したら、自分に知らすことを約束して、秘密な所書を呉れた。分れてから後直に、自分は手紙をやつた。彼女は立派な手紙をくれた。そこで中

た手紙を送つたが、今度は返事が来なかつた。彼女の手紙が郵便局に延滞してあつて、自分がその返事を手にするまでには、一年半も経過した。彼女は息子を産んで、マツグと命名したと知らして来た。彼女の叔父は死んで了つた——實は酒を飲み過ぎて死んだ。「私は今は女主人であるから、若し貴方がお出になるなら歡んでお迎へいたします。」と書いてあつた。自分は息子と妻——言はゞ數日間の——に會つて見たいと思つた。然しその時丁度自分は正しい生活に這入つてゐたので、直に訪ねることは出来な  
いが、何時か一度は訪ねたいと書き送つた。  
然し、その後、彼女は版畫や地圖を賣る男と結婚して、夫婦でリビンスクに居住してゐた。

自分は、絶対に恐怖を缺ぎ、全力を盡して自身のため戦はんと決心した人間を初めてクリスチナに於て發見した。が、その時に自分はその性質が眞に偉大で價值のあることを會得することが出来なかつた。

## 十九

クリスチナと此の挿話の後に自分は町で働かうと思つた。然しそれは自分の趣味に合はなかつた、如何にもそれが愚かな狭い種類の生活に見えたから。自分は労働者がその主人に、平氣で耻辱ともせず、服従するのが嫌であつた。彼等は皆雇主に對する全體の態度から、恰當こんなことを叫んで居るやうに思はれた。

「来て、思ふ存分俺を使へ！俺の身體を食ひ盡し、俺の血を飲み盡せ、俺は天下に家なしだ！」

彼等と共に生活するのは利益でなかつた。酒を飲んで喧嘩を始め、眞の仔細なことで口論し、勞働して居る間は、夜となく晝となく、沈んだ歌を歌つて居た。それを監督する雇主は肥つた金持であつた。麵麩炕房は不潔な所で、人が込合つて居た。其處で彼等は犬のやうに寢て、その唯一の慰藉と云つては惡徳と燒酎のみだ。自分が人生

は悉くあべこべなことのみにだと言せば、確に彼等は自分の云ふことに耳を傾け、氣難しい顔をして、如何にも尤もだと云つて同意した。然し若し自分が人間は神を求めなければならぬと云ふと、彼等は歎息した。が、自分の言葉は實際の印象を與へなかつた。折々彼等は自分に擲論つたものだ。——何故かは知らないが——そして慘酷にも自分を嘲り笑つた。

自分は町が厭になつた。間斷なき商業上の騷擾と雑踏に堪へ切れなくなつた。永久の仕事によつて聾になつた市民は自分には全くの異邦人であつた。多くの公共家屋、寺院及び大建築物があつた。多くの人民が群つて居たが、尙ほ生活は縮められてあつた。何人も自分自身の生活を營まず、凡てのものが或る一つの仕事に束縛されてゐるので、恰當鎖に縛られた犬のやうに、一生を通して同じ溝に動いて居た。

あらゆる騷擾と喧囂の中に、疲勞の音調が響き亘つて居た。寺鐘までも望みなき音響を出した、自分は凡てのものが正しからず、その所を得なかつたことを感じた。

屢々自分は自らを笑はずには居られなかつた。笑ひつゝも、氣持が愉快ではなかつた。自分は凡てのもの、中に、全くの誤謬と虚偽とを見た。然し何故に虚言するかを理解することが出来なかつた。これが一層多く自分を失望さし、遂に自分は深淵の中に陥落して了つた。

夜分にはよく自分は自らの自由な生活を回想した、特に野宿をした夜などには。

田舎では、土地は圓く見える、凡てのものが一々理解され、牽々と心に訴へて来る。人間は手の掌にてもゐる頑是ない幼兒のやうに、その土地の上に横はり温い黄昏の中に包まれ、それと共に星ばつた天を戴き、星の側を滑つて行く。

疲れ切つた身體は牧草や花の強い香で元氣を回復する。吾々は搖籃に横はり、見える手が柔かに揺り眠らしてでもゐるやうな氣がするだらう。

影が草葉を亂して滑り、彼處此處に、さばさは、さらさらと音がする。地鼠がその穴から這ひ出て、靜かに啼のが聞える。遙か離れて森の境界に何か黒いものが起ち上

り、——多分それは牧場の馬であらう——極僅かの間立ち止まり、それから濫い暗黒の海に消え失せる。他の場所に新しいものが跳り上る。終夜、此世の眠れるもの、沈黙した監督者——夏の夜の柔かな影——が原野を音もなく滑つて行く。云は、生あるものが静かな假睡をする爲に退いて行つて了つたのを認め、吾々の身體が草を推し倒したことを苦痛に感ずるのである。

一羽の夜鳥が音をもせず飛び過ぎ、土地の斷片が生を得て活躍し、束縛を免れ、熱望に動かされて、それ自身を満足させようとして飛んで居る。

二十日鼠は草原をさらさらと動いて居る。今小さな柔かな球は吾々の擴げた手の上を滑り走る、吾々は驚き、尙一層強く生の豊富なることを感じる、そして大地自身が吾々の足下に生きて来て、濕潤となり、如何にも親しげに見えた。

吾々は大地が呼吸して居るのを聞く、そしてその夢はどんなものか、どんな方がその胸奥に秘密に成育しつゝあるか、どうして大地は明日太陽を見、どうして明日その

光榮ある最と愛するものを喜ばすかを考へて見たいと思ふ。

吾々はその胸に休み、その中に吸収されてゐる。吾々の身體は愛しい母の温い香しい血に浸されて、身長を増して居る、そして吾々は永久地球の子供であることを知り、感謝して考へてゐる。

「おゝ、大地、自分の至愛のもの！」

力を治やす見えざる流は、大地から噴き出て、芳しい香は空氣を通して、谷川のやうに進む、大地は空間に動く香爐のやうなもので、吾々はその上に輝く木炭である。

星は太陽の登るに當り、その充分なる美を示さんとして、穩かならず輝いてゐる。默想と睡眠とは吾々を苦しめて氣狂しくする。そして希望の輝いた光線は、心靈を通して焔の如く跳び出る。何處かに光榮に充てる神が居る、きつと居る！

「求めよ、さらば爾は神を見る。」如何にも美しい語だ、——決して忘れてはならぬ語だ、眞に人間の理性を動かす價值がある。

春になつて、自分はシベリアへ行く考で町を去つた。然し其の途中で神の正しい道を指示し、生ある間、自分の心靈に絶付くやうなものを與へた人に引き留められた。自分はバームからヴェルクホトグイエに行く道でその人に出會つた。その時自分は森の外邊に横はり、茶にさす湯を沸かすため火を點けて居た。恰も日中で、太陽は焦げるやうに暑く、空氣は樹から出る油ぎつた樹脂の香で充たされてゐた。自分は呼吸するのも苦しかつた。鳥でさへ暑さを感じ、森の深みに逃げ込んで、そこに樂しげに歌つて居た。森の縁は凡てが静かであつた。何も彼も太陽の光線で殆ど溶けるやうに思はれた。樹木、岩石のみならず、自分の身體までも、直に、凡ての種類の濃き色の流に溢れようとしてゐた。

その時、自分はバームの方面から高い震へた聲で歌つて来る男を見つけた。自分は

耳を傾けた。と白衣の巡禮が、帯には茶候、脊部には柔皮の背囊と料理器械をつけて居た。彼はずつと遠くから、自分の方に點頭さ、空笑ひをしながら、愉快らしく歩んで来た。彼は普通の巡禮者であつた。此處邊にはかう云ふ厄介者が澤山居る、その人々には信心深き巡禮も肥るための商業に過ぎないのである。他の點に於て彼等は卑しい無教育な階級で、どんなことをしてても、燒酎に浸り、他人の財産を横領して食ふなどを何んとも思はぬ。自分は心の底から彼等を厭つた。

彼は帽子を採り首を震はして自分に近寄つて来た。その顛顛の動脈が動き始め、絶えず棕鳥のやうにべちやくちやと喋つてゐた。

『ご機嫌よう、若い衆、暑いね、地獄よりか二十二度暑う。』

『それで、お前さんは長く居なかつたのかね。』と自分は訊いた。

『六百年間。』

彼の聲は新しい愉快な響を持つて居た。

この男は頭が小さく、額が高く、蜘蛛の網のやうな皺のよつた顔に奇麗な僅かな灰色の髭があつた。然しその褐色の眼は青年のやうに輝いてゐた。

「面白さうな奴だなわ。」と自分は考へた、彼は話した。

「ウラル山、ハ、ハア！ それは美しい！ 神は最上の美術家のやうに此地球を飾つた。神は凡ての森や、河や、山を如何にも美はしく配置したものだ！」

彼は旅行用器を取り除けて、長い山羊のやうに跳んだり躍ねたりした。自分の湯が沸つてゐるのを見ると、火からそれを取り去つてさも舊知でもあるやうに言つた。

「俺の茶を入れやうか、それともお前さん自身の茶にしたいかね。」

この男がこれを決定する前に、自分は返答する機会がなかつた。

「では、俺のにしよう、それはよい種類で——商人の妻が呉れた非常に高價な茶だ。」

自分は笑はざるを得なかつた。

「お前さんは眞實に山羊見たいだ。」と自分は云つた。

「それがどうか。」と彼は云つた。「あゝ少しは涼しくなつた、が、今少時、休むから、お待ち、お前さんを驚かしてやるから。」

彼には何處かにサベルコを想ひ起さすところがあつた。それで、自分は彼と諧謔を取り交はして見たいと思つた。然し、二三分後に、自分は彼の讒語を口を開けて聽いてゐた。彼の言語は不思議に親げに、而も非常に爽快に響いた。で、自分はこの男が話してゐるのではないやうに感じたが、自分の心はその快活な日の歡樂を樂んで居た。

「見玉へ！ どうだ、眞の天國でないか、山々は如何にも壯嚴に天に聳え、森は峯の頂上まで這ひ上り、足許の小さな草葉は、生の光へ飛んでゐる。萬有は歡呼の歌を歌つて居るのに、何故、人間——地上の王——は陰氣に沈黙して坐つて居るか。」

「然し自分が悲しい思想の餌食であるとしたら、何うてせう？」と彼を試みるために云つた時、自ら考へた——

「この不思議な鳥は何だ。」

彼は指で地上を指した。

『あれは何か。』

『土地だ。』

『いや、もつと高く眺めなす。』

『お前さんは草のことを云ふのか。』

『もつと高く。』

『あれか、あれは私の影だ。』

『さうだ、あれはお前さんの影だ。』と彼は云つた。『然し思想はお前さんの心靈の影だ。何を前さんは恐がるのか。』

『自分は何も恐がつては居なす。』

『虚言を云ふな、若しお前が自分の思想を恐れなければ、もつと愉快な筈だ。悲愁は恐怖の子で、恐怖は不信仰の子だ、お前は恐怖を持つて居る、が、まあ、茶をお飲み。』

彼は小さな錫器に茶を注いで、絶間なく語り初めた。

『俺は何處かでお前さんに會つたやうに思ふ、え、さうでないかね。お前さんはアラアム僧院に居たかね。』

『さうです。』

『何時頃？』

自分は其處に居た時を彼に告げた。

『では、其處ではなかつた。俺は何處かでお前さんの赤い頭を見たやうに思ふ。お前さんの顔には特色がある、ア、多分、俺はお前さんをソロヴキイで見たらう？』

『自分はまだ其處へ行つたことがない。』

『お前さんは其處へ行つたことがない？』  
『どうもお氣の毒だ！』  
古い僧院で非常に立派だ、まあ其處へ行つてご覽。』

『それではお前さんには會はなかつた。』と自分はそれを公言することを悔ゆるやうな



感じをもつて云つた。

『それは重大のことでない。』と彼は叫んだ。『若しお前さんが、以前、俺を見なかつたとしても、兎に角、今俺を見て居る。それでは、お前さんに餘程よく似た誰か外のものであつたに相違ない、それは全く同じぢやないか。』

自分は笑つた。

『どうして、それが同じでせう?』と自分は尋ねた。

『よろしい、では、何故、それが同じぢやないかね。』

『然し自分は——自分です、それは他の人です。』

『多分お前さんは彼よりかもつとよいだらう?』

『自分は知らない。』

『さあ、俺もどちらか分らない!』

自分は彼を眺めて、腹が立つて耐へ切れなくなつた、何うかもうお喋言を、止して

欲しかつたから。然し彼は茶を啜つて、また語り始めた。

『よろしい、そこにゐた人は片眼しかなかつた、——それを非常に苦しめてゐた。凡て此等の獨眼のものでも跛者でも——それが肉體上であつても、精神上であつても——我慢し切れない程に我利的なものだ。お前さんは反對するかも知れないが、俺は獨眼でなければ跛者だ、然しお前さんが俺にそんなことを云ふと、ためにならんぞ! その人はまたそんな性格であつた。彼は俺に云つた、「凡ての人間は悪漢だ。」俺は彼に答へた。「お前もまた馬鹿でなければ、無頼漢だ。馬鹿でも無頼漢でも、どちらでも好きな方になるが可い!」然し、世間の人々がお前をどう思つたつてそれは何でもないが自分で自身をどう思ふかと云ふことが大切なんだ!」それで、吾々人間は何時他人の中にある暗黒點を探がし、吾々の光明の不思議な暗黒の中に息塞るから、人間は一眼で而も盲目なのだ。これと反對にお前が自分自身の光明で、他人の暗黒を照らしたならその時は何も彼もお前に愉快だ。人間は自分自身の外何人にも善を認めやうとし

ない。だから人間にとつてはこの全宇宙は慘憺たる荒野なのだ。』

彼は微笑して話し自分を眺めた。自分は森林の中で道を失つたものが、遠くに聞ゆる鐘の響に熱心に耳を傾けるやうにその話に耳を傾けた、彼が梟の叫聲を救済の聲と間違へてゐるのではないかと思つたから。

此の話から総合して、自分は彼が多く見て考へたことを知つた。然し彼は豪俠な風で自分を取扱つてゐるやうに見えた。でなければ、自分を愚弄し、その子供らしい眼で嘲笑しなかつたらう。自分はアントニウスと相識になつてから、人間の笑を疑ふやうになつた。

自分が姓名を訊くと彼は答へた。

「俺の名はエヒユディエルだ、俺は普く一般の人々には道化者だ。然し自分自身の最善の友だ。』

「お前さんは僧侶ですか。』

「俺は僧侶であつた、然しそれは長い間ではなかつた。俺は放逐されて、六年間サマルの僧院に幽閉されてゐたから、「何故？」とお前は訊くか。——それは教會で説教したところが、愛すべき素朴な人民が俺の言葉を誤解したからだ。彼等は散々撲られて俺は法廷に引出された。それは大詰であつた。何に就て説教したのか、俺は全く忘れて了つた。餘程以前のこととて、さうだ、かれこれ十八年位になる。この位も經つと、或ることを忘れることが出来る。俺の心中にはあらゆる種類の思想が旋轉してゐた。が、その一つをもういひ表はすことは出来ない。』

彼は笑つた。微笑がその顔中の皺に漂つた。而して彼は恰當凡ての山や森を自分で削つたかのやうに周圍を眺め廻はした。空氣が冷かになつてから、兩人は旅行を續けた。その間に彼は云つた。

「お前さんは實際何者だ?』

今一度自分は、アントニウスとの場合のやうに、種々と入り交つた過去の全體を自

分の眼前に暴露さなければならなかつた。そこで少年時代のこと、ヒラリオンとサベ  
ルコのこと、就て話した。この老人は笑つて叫んだ。

「ハア、如何にも見上げた立派な男達だ。眞實神意を會得した奴等だ。彼奴等は吾々  
露西亞の國土に生れた最も勝れた花だ！ 立派な奴等、實に！」

自分はこの讚辭を理解し得なかつた。が、不思議に、彼の歡喜に感動させられた。  
彼は笑ふことを禁じ得なかつた。その頭を後方にそらし、喜んでさーさー金切聲を出  
し、高聲に叫んだ。彼が歡樂を分つべき善良な友を天に持つてゐるやうに誰にでも想  
像されたであらう。

「お前さんは何處やらサベルコに似た所がある。」と自分は親しげな調子で云つた。

「何に？ 俺は實際彼奴に似てゐるかい。」と彼は叫んだ。「俺は彼に似てるなら、うれ  
しい。あゝ、若し神聖な教會が過去に於て吾々を惑はさなかつたなら、露西亞は今ど  
んなにか異つた國になつてゐるだらう？」

彼が云つた此の言葉の意味は不明瞭であつた。

それからテイトヴのことを話すと、何だか彼が實際に自分の義父そつくりなものを  
見てゐるやうに思はれた。そして彼はテイトヴについて、かう云ふ判断を下した。

「何とした掃除人だらう！ 俺はさう云ふやうなものを知つてる、俺はさう云ふ愚か  
な、臆病な……貪慾な豚を知つてゐる。」

それからアントニアスに就て話すと、彼は暫らく考へて云つた。

「あゝ、不信のトマス！ トマスと云ふ名のもものは、みなみな天才ではない、多くの  
人は自分自身の愚鈍によつて不可思議な議論をやる。」

彼は飛んで來た土蜂を逐拂つて云つた。

「あつちに行け、俺の眼に飛び込むなんて……愚な奴、あつちに行け！」

自分は彼の言葉を一語も漏らさないやうに、注意して耳を傾けた。その言葉はみな  
深い思想の結果のやうに思はれた。自分は懺悔僧にても話すやうに彼に物語つた。然

し神に關するところになると幾分か躊躇した。最後に神の像が自分の心靈の中にぼんやりして來た。自分はそれからその長い間の塵埃を清めたいと思つたが、何も残らないまでそれを擦り消したとに氣がついた。と思ふと、自分の心は苦悶を以てどきどきした。然し老人は自分に勇氣をつけるやうに、うなづいた。

『何もするな、何も恐れるな、若しお前が沈黙して居れば、つまり、俺でなくお前自らを欺くことになる。さあ、話せ、話せ！ お前は何かを打毀はしたつて驚くには當らないが、そこに何か新しいものを造れ！』

自分の言葉は皆直に彼に反響し、そして彼に對する自分の信任は漸次増して來た。

三十一

日が暮れた。

『おい！』と老人が叫んだ。『一つ、寝る處を見付けやうぢやないか。』

自分等は山から裂かれた只ある巨きな岩の下に休場所を見付けた。其處には灌木が生へてゐた。自分等は其の暖かな木蔭に腰を下して、火を焚き、そして茶を入れた。自分は言つた。

『どんな話をして呉れるのかね、お老爺さん？』

彼は類笑んだ。

『俺の知つてゐることを皆んな話さう。だが、俺の言ふことを些とでも當にすることだけは御免だよ、俺は教へようなんて思つてゐるのぢやなくて、ほんの話をする積りなんだから。したが、當になること、言へば、人生の行路の危険なことだ、そして人間の發達が有害なものであることだ。銘々の心の中には何時も眞理といふものが此の光明を點けるとき、もつとく煌々と輝やいてゐると人々が思つてゐる。さう思つて懼れてゐるのだ。そこで、大急ぎで各自に適應する限りの眞理を捉まへる。そしてそれを小さな巻物に捲りあげて、「此處に眞理がある、心靈の純粹な食物がある。」と全世界に

向かつて絶叫するのだ。さうだ、其の通りだ。そしてまた其れは此の世の有らん限りは最も慥かなことだらう。ところが、惡漢連——俺たちの敵でまた總べての者の敵——が眞理の目の前へ腰を下して、眞理を喉締めにする。そしてまた有らゆる手段を用ひて眞理の發育の邪魔をする。併しながら、俺が今日此處で言ふことの出来ることが、たつた一つある——明日は何うだか、それは俺の知る限りでない。で、まあ、これは心に留めて置いて貰ひたい。と言ふのは、今日までのところでは、此世には眞實の主人といふものが出現してゐない。だから其の主人が愈よ現はれて來た時には、一體どんな法律を布くか、何んな策略を是認するか、何んな事を廢止するか、また何んなお寺を建てるか、俺は一向知らない。嘗て使徒のパウロが、「一切の事物は救濟の爲になる」と言つたが、多くの人々は此の言葉に感化されて、それがために弱くなつて萎縮してしまつたのだ。』

自分が斯う言つたやうな話を聞いたのは、之れが初めてであつた。而かも自分の人格のために支柱を齧めてゐた矢先に、斯うして人間の自我といふものを否定されるものだから、異様に感じたのである。

それは恰も老人が自分をば、びつたり閉め切つてある扉の前に置きながら、扉を開けても呉れず、また其の蔭には何が匿してあることをすら、告げて呉れもしないやうに思はれた。自分は耐らなくなつて、何だか悲しくなつた。老人の言葉は自分には朦朧としてゐた。よしまた其の言葉から時々青白い火花が發しても、それは單に自分を盲目にするばかりで、心の闇を照らすことは出来なかつた。その晩は月夜で、黒い物影が自分等を取り圍んでゐた。森は靜かに四邊の小丘の上に這ひ、峯々の上には星影が火の鳥のやうに梢に煌いてゐた。何處か、程遠からぬ處に、小川がさらさら流れてゐた。梟は時々森の中で啼いた。と、老人の話は——人生に對して激せられてゐるのだが、靜かに口から漏れて夜の空氣の中へ消えた。なんといふ不思議な老人であらう！彼は今しも頬へ來た胃虫を捉まへて、それを手のひらへ載せて言つた。

『お前は何處へ行くのだ、ちび公？ さあ！ 草の中へ飛んでけ！』  
自分は胃虫が大好きで、また花や草の中のその神秘的な生活を見付けることに殊のほ  
か興味を持つてゐたので、此の時嬉しかつた。

自分は老人に向つて有らゆる質問をした。そしてそれ等の質問に簡單明瞭に答へて  
呉れることを欲した。然し老人は自分の解答を覓めた諸問題を避けてゐる——實際、  
恰もそれ等の諸問題をば飛ばしてゐるのに氣が付いた。自分は彼の生々した顔が好き  
であつた。その顔には焚火の赤い反映がちらつき、心の歡喜で震へてゐた。自分はそ  
れが羨ましくしてたまらなかつた。老人は自分の二倍も生きてゐたのだ——恐らくまだ  
まだ長生するだらう——が、その精神は晴れやかに明るく輝いてゐた。

『自分は斯ういふことを聞きました。』と自分が言つた。『信仰は虚妄であると。あなた  
は何う思ひますか？』

『それは、な。』と彼が答へた。『其の人は自分で何を言つてゐるのか少しも知らない人

だ。だつて、信仰といふことは一の莊嚴なる創造的感情だ。活力の過剰から人の心に  
生じたものなのだ。此の力は人間の若々しい精神を絶えず動搖させる偉大な衝動で、  
やがてその衝動をば行爲に導くものである。人間は、然しながら、自分の行動を外部  
のいゝろんな方面から遮られたり、制限されたり、抑制されたりしてゐる。すべての人  
は、自分の心の奥底に横はつてゐる生きた實を培養する代りに、穀物を蒔いたり、鐵を  
鍛かしたりしなければならぬものだと思つてゐる。更に又、自分の持つてゐる總べて  
の實の利用法に未だ馴れてゐない——實の處、未だよく解つてゐないのだ。心の混雜  
を恐れ、疑心暗鬼を生じ、そして汚れた自分の心の反映を怕れるのだ。鬼かく自己の  
心靈の真相を理解しないものだから、信仰の形式や、謂はゞ自分で作つた陰影に、恭  
しく禮拜するのだ。』

自分は老人の言ふことが克く解つたやうな風をすることが出来なかつた。そればか  
りか、何だか佛としたので、斯う言つた。

『よろしい、私の質問の要點を答へて呉れるまでは、お前さんを此處から遣らないから。』

自分はそれから眞面目に彼に言つた。

『お前さんは何故いつも神の話を避けるのですか？』

彼は駭いたと言つた風に自分を見て、そして答へた。

『だがね、お前さん、俺はいつも神に就いて話してゐたのだよ。お前さんにはそれが解らなかつたかね？』

老人は躓いた。そして焚火を顔に映らせながら、自分の方へ手を差出して、低い然も胸に刻むやうな聲で言つた。

『どう云ふ神か？ 奇蹟を行ふ神なのか？ 我れ等の父なる神か、それとも各自の心が産む神なのか？』

自分は苦しみを覺えたので、跳び起きて身の廻りを見た。老人はまるで氣が狂つて

喋つてゐるやうに見えた。黒い物影は自分等の周圍に竊かに屯し、森から聞える吠ききは、物やさしい炭火の弾きや小川の私語を掻き消した。自分は躓かうと思つてゐると、老人は恰も誰かと口論でもしてゐるかのやうに大きな聲で喋り初めた。

『神は人間の弱點に依つて創造されたものではなくて、人間の力の過剩からして造られたものだ。また神は吾々の内に存在するものであつて、吾々を離れては存在しないものだ。然るに人は心の疑ひに苦しめられて、神をば心の外へ連れ出してしまふ。そして其の神をば、意志の如何なる制限にも耐へられぬ吾人の誇を抑制する爲めに、只あゝ頂邊へ安置したのである。お前さんに言つて置くが、お前さんは自分で自分の力を弱めて了つて、其の發達を妨げたのだ。完全と云ふ理想を造ることに、大急ぎになり過ぎてゐたのだ。これが悲しい禍の原因になつてゐるのだ。凡そ人間は二つの階級に結着する。一つは絶えず神を造つてゐる者で、今一つは常にまた永久に、全世界の奴隷たるのみならず、吾々を司配する衝動の奴隷たるべき者である。彼等は此の力を

櫻まへて、人間の外側へ、神——人間の敵であり、且つこの世界の審判者であり支配者である神——の存在をば是認しようとしてゐたのだ。彼等は斯うして基督の心霊の心象をば毫無しに塗抹し基督の十誠に背いてしまつたのだ。つまり、基督は是等の人々の考とは全然反對で、人類の上の主権といふことは全然是認しなかつたからだ。』

老人の顔は微笑で包まれた。彼は無上の嬉しさに我を忘れて了つて、只だ最う酔つたやうになつたのである。自分は彼が狂人のやうに喋るのを聞きながら、其の言葉の節々に苦痛と悲哀とを感じた。が、彼に警嘆したことを隠すことが出来ず、有り丈の熱心を以て聽いてゐた。

『然しながら神を創造する人達は未だ生きてゐる。然う早く亡くなつてしまやしない。その人達は爰にまた新たな神を造るのに人知れず忙がしがつてゐる。それはお前さんの心に現在持つてゐる神——美と智と義と愛とを司どる神なのだ。』

彼の言葉は自分に衝撃を與へたやうであつた。自分を起ち上らした。そして恰も手に

に武器を執らしたやうであつた。自分の周囲には軟かい物影が徘徊いて、其の翼が自分の顔を撫てた。で、自分はぎよつとした。足の下で大地がぐるぐる廻つたのである。そこで考へた。

『悪魔が誘惑の言葉を弄して人間を唆すといふことが眞實であらうか？ また此の老人が自分をば此の上も無い大罪に陥入れるために罫を拵へたのであらうか？』

『さあ。』と自分が言つた。『それぢや神を創造するといふ人達は一體誰です？ また貴方が期待してゐる人生の主人といふのは一體誰のことです？』

老人は女のやうにニコニコして答へた。

『神を造るのは民衆さ——誰も數へることの出来ない一般の群集さ——民衆は教會が讚美する人達よりも一層偉大な殉教者だ。其の民衆こそ奇蹟を行ふ神なのだ。俺は民衆の精神を信じる——不死不滅の民衆、その民衆の力を俺は承認する。民衆は人生の疑ふべからざる唯一の根源だ——民衆は過去、現在、未來を通じて有らゆる神々の唯



一の親だ。』

『此の老人は馬鹿なのだ。』と自分は思った。

それまでは、自分は徐々ながらも真理の方へ導かれて居るのだと思つた。一度ならず、この老人の言葉は高所を指してゐる灼熱した指のやうに思はれた。そして又それ等の言葉は、自分には苦しく、熱く、痛くはあつたが、有益なものゝやうにも思はれた。然しながら今しも自分の心は急に重苦しくなつたのである。旅の途中でパツタリ足を停めて、酷く失望した。いろ／＼と違つた種類の焔が胸の中で暴れ廻つた。すると、急に哀しくなつたが、同時にまた言ひ知れぬ悦ばしさを覺えた。で、全く當惑してしまつた。

『多分、あなたは百姓の話をして居るのでせうね?』と自分が言つた。

老人は威嚴のある語調で聲高に答へた。

『俺はこの世の勞働社會に就て話したのだ。その勞働社會の結合した力——神を創る

唯一の永久的根原に就て話したのだ。如何にして民衆の意志が奮起されるかをよつて考へて見るが可い。暴虐によつて離間されてゐた人々の大團體が如何にして今聯合してゐるか。多くの人達は今に於てさへも、世界中の總ての力を單一のものに鎔和し、且つまた宇宙を抱擁するところの素晴らしい奇麗な一個の神を創造する方法を究めてゐるのだ。』

老人は、恰も此の眞夜中に、單に自分ひとりてなく森も山も其の他あらゆる生物が丁と目を覺ましてその話を聞いてでも居るかのやうに、素敵な大きな聲を出して説くのであつた。

老人は鳥が飛ばうとする時のやうに身慄ひをした。然し自分に取つては、總て皆一場の夢——自分を壓伏する一場の夢のやうに思はれた。

自分は心中に自分の神の畫像を描いた。そして其の神を臆病な煩悶してゐる人々の陰鬱な階級と對立せしめた。神を創造せんとしてゐたのは是等の人々であつたのか?

自分ば彼等の小ばけな悪意や、臆病な貪慾や、屈従と勞苦とて屈んだ體や、心配と悲しみとて霞んだ眼や、吃る舌や、愚かな思想や、あらゆる迷信の餌食を想つた。かう云ふ虫けら共が、一つの新たな神を創造することが出来るだらうか？

憤怒と苦笑とが自分の心から噴き出た。自分は老人が自分から或る物を奪ひ取つたのだと思つた。そこで言つた。

『あゝ、お老爺さん、お前さんは花園を荒す山羊のやうに自分の心を荒しましたね。みんなお前さんの話のお庇です。それは然うと、お前さんは誰にでも今のやうに話しますか？ 自分の考へでは、大變な罪だと思ひますがね。お前さんは人に對して憐愍の心がないのだ。皆の人は慰藉といふものを欲がつてゐる——勿論です——だのにお前さんは疑懼の種子をばらばら蒔いて居るのだ。』  
彼は頬笑んだ。

『では話すがね。』と彼が言つた。『お前さんは俺が通つて來た丁度その道をば今歩いて

ゐるのだ。』

『お前さんは無茶を言つてる。』と自分が答へた。『自分は決して人間をば神と同一の水平線には置かないです。』

『然しそんなことを言ふ必要がない。』と彼は言ひ返した。『若しお前さんが其んな風にするのなら、それぢやお前さんは頭に主人を戴いてゐるのだ。俺は別々な人間に就いて言つてゐるのぢやなくて、民衆——全世界の民の結合した靈的の力に就いて言つてゐるのだ。』

忿怒は自分を壓服した。此の百姓靴を穿てゐる虱たかりの神製造人は、何時も酔つ拂つてゐて、小突がれたり引搏がれたりしてゐるので、自分は何とも云へぬ嫌な氣持がした。

『ちよつと黙れ。』と自分が言つた。『貴様は神を罵る大不敬漢だ。最高の人間とは何だ？ 心も體も汚れてゐる。外も内も乞食だ。屑屋にても賣つちまへ！』

すると、不思議なことが起つた。老人は飛び上つて叫んだ。  
『臥さり居れ、外道め。』

老人は両手を振り廻しながら地だんだ踏んだ。自分は今にも彼が殴り懸りはすまいか、突いて來はすまいかと怖ろしかつた。彼が今しがたまで豫言口調で喋つてゐた時は、言はゞ自分とは縁遠い處に立つて居たのであつた。ところが今、斯うした可笑な風をしてゐるのを見ると、何だか人間臭いところがあるやうに思はれた。

『臥さり居れ、米食ひ鼠め！』と彼が叫んだ。『何うやら貴様の血管には、腥い貴族的な血が流れて居るやうだ。此の棄兒め、民衆は貴様などには何の用もないのだ。一體貴様は自分で何を言つてゐるのか知つてるのか？ やい此の傲慢な懶け者の土地泥棒。貴様は誰にわん／＼吠え付いてゐるのか、それも知らないのだな、此の痺癩かきめ。貴様は人類の掠奪者だ。而かも貴様は、自分の思ふやうに涉々しく行かないと言つては、人類の背中に乗つかつて人類をば侮辱しくさるのだ。』

彼は自分の周圍を踊り廻つた。その影は自分を暗くし、その言葉は鞭が飛んで來るやうに、自分の顔を打つた。自分は彼が殴り付けるかも知れぬと思つたので、全く怖ぢ氣が附いて、脇へ飛び退いた。自分の體はかれこれ彼の二倍もあつて、力量は恐くは十倍もあつた。いらうけれど、どうもそれを引留める元氣がなかつた。彼は夜中であることや、また四邊には誰ひとり居ないことや、若し自分が打つ倒さうと思へば彼は立ち處に苦もなく平伏つてしまふのだと言ふことも全く忘れてゐるやうであつた。吃驚した緑衣の大僧正や、狂僧ミクハイロや、正公會の色々な僧侶たちが、何んなに自分に罵詈雑言を浴せかけたかを想ひ出した。彼等は自分と争ひをする積りであつたが、それでも其の言葉には何處か臆病らしいところがあつた。然るに、此の老人といへば、弱い癖に怖れてゐない。まるで自分を小兒のやうに叱り付ける。いや、寧ろ母親が子供を叱るやうである。老人の怒りの中には、春の初雷の様な、何だか物優しい奇妙な調子があつた。老人に取つても憤れつたく、自分に取つては合點の行かぬ此の一事に

全く當惑して了つた。假令彼の忿怒には何處かにお道化たところがあつたとはいへ、其程にまで怒らせれたことが自分には悲しかつた。自分は誰からでも棄兒だと言はれるのが嫌であつたから、老人の侮辱は自分の心を害ねた。が、一方では、却てその立腹を悦んだ。それは老人が喋つた通りであることを信じてゐる人の立腹だと感じたからである。斯うした立腹は人間に取つて有益なものである。その立腹には多大の慈愛——心の糧があるから。

自分は彼の足下に平伏した。と、彼は上から自分に叫んだ。

「貴様は民衆を何う知つて居るのだ？ 民衆の歴史と言ふものを知つてゐるのか、この旨の愚物！ よろしい、民衆の生活の歴史を読んで見い。それは何物よりも遙に深く教へて呉れるわ。さうすれば貴様は何を持つてゐるか、何んな力が貴様の周圍に生立つてゐるか、それが理解されて何んなにか幸福だらう。他國へ來てる家なし乞食め。一體貴様は露西亞は何だか知つてゐるか？ 或はまた、ヘラスと言はれてゐる希臘は何

だ、羅馬は何だ？ 誰の意志、何んな心意で、總の王國が建設されたものか、貴様知つてゐるか？ 誰の骨の上にお寺や教會が建立せられたか？ 凡ての學者が話すのは誰の言葉だ？ 世界の有りと有らゆる物、貴様の心に宿つてゐる總ての物——何れも皆な民衆によつて造られたものだ。然るに貴族はたゞ其の製作品に仕上げの磨きを懸けてゐたのだ……」

自分は一言も言ひ出すことが出来なかつた。が、優しい眼付で老人を眺めた。老人は自分で眞理だと信じてゐることを辯じ立てゝゐる時には、何の恐怖も無かつたのである。

老人は汗でびつしよりになり、眞赤な顔をして、殆ど息も絶えさうに腰を下した。而も自分は彼の眼に涙が輝いてゐるのを認めた。これを見ると何だか胸が騒いだ。自分は今まで相手を怒らして諍ひをしても、決して泣かしたことは無かつたから。

「よく聽け、無宿者奴。」と彼が叫んだ。「露西亞の民の話をしてやる。」

「だが、まあ一寸休息んだ方が可いてせう。」と自分が言った。

「黙れ。」と彼が自分に向つて握り拳を振りながら叫んだ。

自分は明らかに笑つた。何うしても笑はずには居られなかつたのである。

「老爺さん。」と自分が言った。「ねえ。老爺さん！ お前さんは奇妙な人だ。お氣に障つたのを許して下さい。」

「馬鹿野郎！ 貴様は何うして民衆を傷けることが出来たか。此の難儀者め、貴様は民衆を——強大な、至高な民衆を罵りをつた。それは民衆を誹謗する貴族者流に取つては大いに尤もなことだ。貴族には、その良心の叫びを鈍せらる根據がある。即ち彼等は世界の門外漢だからだ。然し貴様は一體何者だ？」

その瞬間、彼を見成つてゐるのは大いに面白かつた。彼は忽ち非常に氣高く又嚴かに見えた。その聲は穩かですして落ち付いてゐた。恰かも福音書でも吟誦してゐるかのやうに、整つた調子で以て流暢に語り、そして空の方を眺めた。その眼は次第に大

きく圓くなつた。彼は跪いたが、立つてゐた時よりもずつと大きく見えた。最初自分は疑惑の笑顔で聽いてゐたが、嘗て教父アントニアスと一緒に居た時、露西亞歴史を讀んだことを想ひ出した。そして其の歴史が、恰も再び自分の前へ展開されるのである。老人はその不思議な物語を自分に言つて聞かした。で、自分は其の物語の事柄と自分が嘗て書物で讀んだ事柄とを比較した。事實は同じであつた。只その解釋だけが全く違つてゐた。その物語がキイエヴの古王國の陥落まで來た時、老人は言つた。

「お前聽いてたか？」

「え、有り難う。」

「よろしい。だが、今までに其んな英雄が居つて戦争をしたのではない。實は民衆が露西亞建國の偉業を子孫に傳へるために、自分達自身の偉勳を想像の人物によつて人間化したのだといふことを覺えて置け。」

それから彼は最う一度、サスマルと其の歴史を語り續けた。

自分の心の眼には今尚ほ次のやうな繪巻が残つてゐる。太陽は既に山の後ろに昇り夜は森に隠れて鳥を起してゐる。微かな雲が吾々の頭の上に蓄薇色の列を爲して漂つてゐる。そして二人は巖の下の露つばい草の上に坐つて、一人は遠き昔を語り浮べ、居り、他の一人は幾多の困難辛苦によりて、その不毛な森林が征服されたと云ふ物語に、疑はしく駭いたと云ふ様子で、耳を傾けてゐる光景である。

老人は其物語を恰も自分ですつかり目撃したかのやうに話した。人々は力強い腕で打ち振られる斧の唸りを聞き、多くの人々が寄つて集つて沼を排水し、氷つた河筋に沿ふて鬱蒼とした森の奥へどん／＼深く這入り込み、蠻人の村を征服してそれを開き町や寺院を建設してゐるのを聞いた筈だ。然るに民衆の統治者たる諸侯たちは、いづれも民衆の強き腕のお蔭で割據分立して置きながら今度は諸侯同志で戦争を始めて人民を掠奪したのである。すると曠野の中から韃靼人が遣つて來た。が諸侯の中には唯の一人も民の自由の爲に戦ふ者が無く、また名譽も無ければ力も無く、一人の智者も無

かつたのである。諸侯は民を韃靼人に賣つた。恰も家畜のやうに韃靼王へ賣つた。そして農民の血を賭して、農奴を支配する君主權を買つた。ところが、諸侯たちが韃靼人に統御術の暗示を與へると、悉く韃靼王に占領せられて、諸侯は自滅して了つたのである。

自分等の周圍には、恰も姉のやうに深切で思ひやりのあるやうに思はれた温かな柔しい夜が衰へた。

老人は疲れ切つて話を止めた。太陽は今その頭の上にあつた。彼が史上の事實をその胸中に思ひ浮べ、火のやうな言葉でもつて説いたのも、そこまで終つた。

『そこで、』と老人が言つた。『お前は如何なる人類が成功したかと言ふことを會得したであらう。またお前が此處へやつて來て、愚なことを言つて侮辱した其の眞際まで苦しめられてゐた總てのことが解つた。今日俺は人類が他人の意志に反抗して何んな事を仕遂げたかといふことを話した。で、少し休んだら、如何なる人類の精神が

あつたか又その人類は如何にして神を求めたかに就て話して聞かせよう。』  
彼は轉りと横になると、ちいまつて子供のやうに眠てしまつた。

二十二

自分は眠ることが出来なかつたので、炭の燻りに苦しめられて居るものやうに坐つた。最う遅くなつてゐて、太陽は空に高く、鳥は聲を限りに囀り、森は露を浴び、優雅な緑の着物を着けて、太陽にさらさらと挨拶をしてゐた。

人々が山を降りて來た。全く普通の人民で、腰を曲げて歩いた。自分は彼等を見ながら、何一つ氣を引くものがなかつた。

我が先生は射をかいて寝てゐた。自分は其の側に竊と坐つて、想ひに耽つた。人々は自分等を横目に見てぞろぞろと續いて通つたが、誰も自分の挨拶に答へなかつた。

『あれで、自分が聞いた此の國の建設者たる剛勇な戦士の子孫と言へるだらうか？』

と自分は思つた。

夢と現實とが自分の疲れた頭の中で混亂した。之れが自分の一生の危機であつたと悟つた。民衆の心が産んでゐる神に就いて老人の言つた言葉が自分を悩ました。自分は何うしてもそれに一致することが出来なかつた。自分に宿つてゐる心意の外に他の心意のあることを知らなかつたからである。自分は總ての農民——實は知れる限りの男女——を、自分の記憶してゐる限の彼等の會話に就て種々と推測して、心の中に描いて見た。そして多くの俚諺や不敬な語を發見したが、極めて詰らない思想であつた。一方に於てはまた、その荒々しい奴隸的な生活状態や、日々の麵麩のための奮闘的労働や、冬に於ける窮乏困難や、陰氣な日の惱ましき心勞や、その心に蒙る屈辱などを、自分は實感したのである。

『此の人生の何處に神がある？ 神が居るやうな場所は何處だ？』  
老人は眠つてゐた。自分は彼を揺り起したくなつて、その顔を覗いて叫んだ。

『お話しよ！』

間もなく、彼は自分で目を覺まし目ばたきして頬笑んだ。

『やー！ お晝に近くなつて来た。ぢや、俺は行かなくちやならん。』

『此の暑さに何處へ行かうと言ふのかね？』と自分が云つた。吾々は麵麩も持つて居れば、茶でも砂糖でも——必要な物は何だつて持つてゐる。お前さんが自分に約束したことを果して呉れてからでなくちや、行かせる譯には行かない。』

彼は笑つた。

『お前は、俺がお前を置き去りにして行くと思つてゐるのかい。不仕合者！』

彼は少時考へて、斯う云ひ足した。

『マトヅ、今はお前は此の浮浪生活を止さなくちやいかんよ。お前にはもう時期が遅いんだ。てなければ多分餘りに早過ぎるのだ。お前は大きいに學んでゐなければならぬのだ、もう時期を逸したんだ。俺を見い。』と彼が言つた。『俺は五十三だ。それであつて

未だ若い者等から學んでゐるのだ。』

『其の若い者つて云ふのは誰です？』と自分が尋ねた。

『お、其の若い者等は今生てゐるのだ。お前は其の者等と一二年暮して見なくちや可かぬ。工場へ行け。此處から遠くない——ほんの三十里ばかりの處にある。其處へ行けば俺の仲好しが居るよ。』

『一體お前さんは何を私に言ひたいのですか、それを先づ聞かせて下さい。さうすれば自分は何處へ行くべきかと言ふことを考へませう。』

吾々は本道に並行した一筋の小徑を辿つた。そして自分は最う一度老人の高い聲と不思議な言葉に耳を傾けた。

『一番初めの眞實に通俗な神であつた基督は、恰當、不死鳥が燐の中から現はれて来たやうに、人々の心の中から生れたものだ。』

その瞬間、老人は再び全身が火と燐になつて、恰も空中で新らしい言葉を引續せう



としてゐるかのやうに、その小さな手をば顔の前で四方八方へ動かした。

『長い時代の間、世界はその双肩に或る人々を乗せてゐた。そして過つた事には、其の人々に働きと自由を與へて自分の頭上へ奉り上げ、何處か此世の高い所から正義の道を指示して呉れるやうにと待つてゐたのだ。ところが選り出された其の人達は、一寸した頂上に達すると直に、夢中になつて了つた。力の亂用によつて衰へ、尙ほ頂上に止つて居たいと思つた。自分等を奉つて呉れた人々のことをば忘れて了ひ、そして人類の運命を和らげて、益々楽しくしようとはせずして、單に人類の新たな重荷となつたのだ。民衆は其の心血を濺いで育て上げた息子達が銘々の敵になつてゐたのを見た時には、それを信じなくなり、指導者をその儘高所に放擲して置いて、遂に自ら倒れるに任じた。そして其の民衆と共に國家の壯大や勢力が衰微したのだ。そこで民衆は、人生の法律は自分等の中から唯一人の者だけを高め、又民衆の意志によつて高めた此の一人の者の智識に彼等の運命の指導を委ねるといふこととてなく、寧ろ自分自身の眼

で人生の行くべき道を認め得るまで萬人を一樣の高さに上げることにあるのだと悟り出したのである。民衆が普遍的平等の必要を自覺した其の日は、即ち基督の生れた日であつた。人民は彼等の正義の觀念を生きた人格の中へ權化せしむる方法をいろいろ求めてゐた。——君主も神も總て萬人と同じ者でなければならぬ——そして屢々人々は、此の普遍的の刺戟によつて、民衆の意志を一定の言葉に纏めて、永久に保存しようとして試みたのだ。斯うして總てそれ等の思想が單一の實體に凝集せられた時に、其の中から、民衆の窺兒たる生きた神が現はれたのである。』

彼が基督に就て話したことが自分の心を感動させた。然し民衆は何うして基督を生じたのか、自分にはそれが分らなかつた。

自分は老人にさういふと、彼は答へた。

『お前さんが知りたいたいと思へば、自然に合點がいつて来るし、またお前さんが信じたと思へば自分で解つて来るよ。』

三日間、二人は一緒に愉快に彷徨うた。其の間老人は始終自分を教へて呉れた。そしてまた過去に就ても自分を明らかにして呉れた。

老人は現時に至るまでの民衆の詳しい歴史を語り、その騒動時代の話や、幫間や道化者——その悪戯によつて民衆の記憶を喚起し、民衆の心に真理の種を蒔いた——に迫害を起した時代の教會の事を自分に話して聞かした。

『サベルコと云ふものが何者であるか、いま會得されたらう？』

『え、やつと解りました。』と自分が答へた。

『解れば結構、小さな事も大きな事から起るし、大きな事も小さな事て出来てゐるものだと言ふことを覚えて置くが可い。』

自分等がヴェルクホトヴニに着いた時に、老人が言つた。

『さあ、俺はこれから俺の道へ行くよ。だからお前さんも自分の思ふ所へ行つたらよからう。』

自分は彼と訣れるのが悲しかつた。併し訣れる必要を感じた。彼の思想は益々自分を征服したから。言は、彼は自分の心靈を覺醒させ、また惱ましたのだ。

『何を考へてゐるのだ？ 工場へ行きなさい。成るべくなら其處で仕事に有りつのが可からう、俺の若い友達等と話す可い。後悔するやうな事はないよ、俺が保證する。其處に居る者はみんな解つた人達で、俺自身も其處の人達から何かを學んだのだ。お前さんも解つてゐるだらうが、俺も満更の馬鹿でもないつもりなんだ。』

『どれ、おさらばと爲よう。解つてゐるだらうが、俺は何もお前の爲に悪しかれと思つてゐるのぢやないのだよ。其處の人達は皆んな新しい人で、活氣が横溢してゐる。どうかまわ俺の言葉を用ゐてお呉れ。』

『腫孔は。』と自分が言つた。『小さくても、色々なものを見られる。然し其處の人達は常に正確に物を見てゐるのでせうか？』

『其の目をはつきり開けてゐなさい。』と彼が叫んだ。

『全心を集めて見詰めなさい。俺はお前に信ぜよ云ひつけるか。いや、學んで悟れよと云ふのだ。』

二人は互に抱き合つて別れた。老人は如何にも嬉しさに、恰も二十歳の少年のやうに歩いて行つた。此の小鳥が自分を離れて、何處かしら神の知る處へ、最う一度あの歌を唄ひに飛んで行くのを見てゐると、何だか物悲しくなつた。自分の頭の中はぐるぐる廻つた。自分の思想は、宛然年の市の早朝に於ける露西亞の小百姓のやうに騒々しく、ごつた返しに難踏した——睡くて、鬱陶しくて、のろりとして、何う氣を取り直さうとしても端然とすることが出来なかつた。頭腦の中では總ての物がぼんやりして、思想の中には、他の要素が無様に混じてゐた。そして全く自分の思想の要素が確に自分以外の思想の中に混つてゐた。自分は憤つたくてならなかつたが、笑ひたかつた。——つまり自分の頭腦の中が、まるで皆な最う襤褸屑か何かのやうに、ぼろぼ

ろになつてゐたのである。

自分はヴェルクホトヴィを去る時に、此の道は何處へ行くのかと尋ねて見ると、イセスキー工場へ行けるのだといふことを知つた。

イセスキー工場こそは老人が自分を遣らうとした處である。が、何だか其處へ行きたくなかつたから、他の道を執つた。

自分は目を開いて、村から村へと漂つた。其の邊の人々は、何れも顰めツ面をしてゐて横柄で、話をするのを嫌つた。そして皆なが皆な氣遣はしさに、自分を眺めた。彼等は明かに、自分が何かを盗みはしないかと怖れてゐたのである。

『ははあ、此の連中が神を創るのだな！』と自分は斯うした詰まらない田舎者を見て思つた。

自分は其の道の行先を尋ねた。

『イセスキー工場へ。』これが自分に與へられた答であつた。

『何ういふ譯だらう？』と自分は思つた。『總ての道路が皆んな彼處へ行くやうだ。』  
自分は村を越え森を越えて歩いた。そして今しも遠くから其の工場を眺めた時には  
恰當草の中の甲虫のやうにぐるぐる廻つた。其處からは煙が揚つてゐたが、格別自分  
の氣を惹かなかつた。不安と躊躇とに壓迫されて、何だか變な氣持になつた。皮肉な  
笑ひが唇に上つた。そして自分をも含めたこの全世界をば思ふさま罵倒したいと思  
つた。

すると、俄に自分は何時の間にか、斯う決心をしてしまつた。

『自分は此の工場へ行かう。』

### 二十三

自分は穢い地獄みたやうな處へ來た。山と山との間の谷間には、伐り倒された木の  
株が一面にあつて、廣い一構への建物が立つてゐて、その屋根からは鍛冶場の焔がば

つぱつと出てゐた。高い煙突は轟々と屹立し、到る處に水蒸氣と煙の雲が佇んだ。四  
邊は煤烟で覆はれ、大鐵槌は重々しくどしんどしんと響き、煙つた大氣は鏗い金の音や  
物の軋る音などで震へてゐた。鐵と薪とは到る處にあつた。煙と、焔と、湯氣とは、  
近づく者の息を奪ひ、有らゆる重々しいがらくた物が寄り集つてゐる此の凹地には、  
甲虫のやうに黒い人々がよるめいてゐた。

『實に深謝します、老爺さん。』と自分は心で思つた。

『こんな楽しい處へ寄越して下さつて。』

自分が工場といふ處へ這入つたのは、これが初めであつた。騒然たる物音に耳を聳  
し、惡臭に呼吸を奪はれた。自分は通路を行つて、錠前師のピーター・ヤギツチに面會  
を求めた。自分が物を尋ねた人々は、皆咬み付くやうな返事をした。恰當、彼等は午  
前中お互に喧嘩でもしてゐて、まだそれが治らないとでも云つたやうであつた。  
『さうだ、此處には神を創る人々があるのだ！』と自分は獨言つた。

頭の尖端から足の爪先まで、煤烟だらけになつて、まるで熊のやうな、肥つた、屈強な男が一人やつて來た。その穢れた着物は、日光を受けて油のやうに光つた。自分はこの男に、錠前師のピーター・ヤギッチを知らないかと尋ねた。

「誰を？」

「ピーター・ヤギッチ。」

「何故？」

「その方とお話をしたいのです。」

「それは儂だ。」

「さうですか——今日は！」

「今日は。そこで、何ういふことですか？」

「貴方へのご紹介を持つてゐますので。」

彼は自分より肥つた髭髯の深い、肩の廣い、がつしりした男であつた。その顔は煤

烟で眞黒で、太い眉毛の下に灰色の小さな眼があるのが、辛と分るくらゐであつた。帽子は頭の後ろの處に載せて、髪は極めて短く刈つてゐた。彼はどこか百姓じみてゐたが、瞭然さうとも見えなかつた。

彼が紹介状を讀むに當りて、顔は皺むし、口髭は動いたから、慥かに讀み難くかつたに違ひない。然し忽ちその顔色は輝いて、白い齒は光り、親切な子供らしい目が開いた。そして皺が頬から消えた。

「は——は——」と彼が叫んだ。『して見ると此の偉い老人は未だ生きてゐるのだ。何よりも喜ばしいことだ。ではね、通路の端へ行きなさい。さうすると山の麓に綠色の扉の家が一軒あります。其處へ行つて先生をお尋ねなさい——ミクハイロと云つて儂の甥です。それに此の紹介状をお見せなさい、儂は後から直ぐ行くから。』

彼は恰も兵士が喇叭で合圖をするやうに話した。そして話をして丁ふと、大手を振つて歩いて行つた。

『妙な初対面だ。』と自分は思った。

教へられた家に行つて、自分は普通の若い人に會つた。その人は木綿の職工服を着て、前掛を前で結んだ。筒袖を捲り上げてゐたが、その手は白く華奢であつた。

『ヨナシユ教父は何うしてゐますか？ 達者ですかね？』

『はあ、有り難う！』

『あの人はもう訪ねて来て呉てないのでせうか？』

『そのことは何とも言つてゐませんでした。あの人はヨナシユと言ふ名なんですか？』  
若い人は訝かしさうに自分を見て、手紙を讀返した。

『それぢや、あの人は何と言ふのでせう？』と彼が言つた。

『彼は自分でエヒユテイルと言つてゐました。』

若い人は笑つた。

『は！ は！ それは只だあの人の綽名なんですよ。私が付けたんです。』

此の男は執事のやうに、長い滑らかな髪をしてゐた。顔色は蒼白く、眼は水色をしてゐて、此の穢らしい土地の人ではないといふ印象を人に與へた。彼は部屋の中を無遠慮に歩いた。そして自分を恰も布地の見本か何ぞのやうに仔細に吟味した——その所爲は自分を苦めた。

『あなたはヨナシユ教父を久しくご存じですか？』と彼が言つた。

『四日間です。』

『四日間。』と彼が繰返した。『よろしう。』

『なぜ——よろしいのですか？』と自分が尋ねた。

『まあ、さうですよ。』と彼は肩を縮めて言つた。

『なせ貴方は前掛を掛けておゐるのであるのですか？』

『私は製本をしてゐたのです。』と彼が答へた。『伯父が來ましたら、皆で一緒に晚餐を食へませう。それまでに一寸洗つて來たら何うですか？』

此の男は年齢の割には餘り落ち付すぎでゐるやうに思はれたので、一寸調弄つて見る氣になつた。

『それでは何ですか、他の人達は此處で洗ふのですね？』  
彼は驚いて眉毛を上げた。

『何故洗つたら可けないんですか？』

『私は清潔にしてゐる人には一人も會はないんですがね。』と自分が答へた。  
彼は兩眼を半ば閉ぢて、疑と自分を眺めた。

『此處に居る人達は働いてゐて少しも惰けるやうなことはありません。だから、さう度々洗ふことが出来ないのです。』

自分は悪かつたと思つた。で何とか答へようとしてゐる時に、彼はく、く、と廻つて部屋を出て行つた。自分は耻かしく感じて腰を下し、そして周圍を見廻はした。部屋は大きくて奇麗であつた。隅の方に晚餐の卓子が置いてあつて、壁には書物の棚が懸

けてあつた。書物棚には聖書が一冊と、福音書が一冊と、古いスラブ教會の詩篇が一冊あつたが、大部分は世俗の書物であつた。

自分は洗ひに庭へ降りて行つた。すると伯父さんが帽子を矢張り頭の後ろの方へ被つて遣つて來た。伯父さんは碯と手を打つて、牡牛のやうに頭を前へ突き出した。

『儂に水を汲んで呉れんかね。』と言つた。『儂も洗ひたい。』

彼の聲は喇叭のやうに吼えた。そしてその掌は、まるで綺麗な肉汁皿のやうであつた。彼は顔の煤烟を洗ひ落とすと、赤銅色の皮膚が其の出張つた頬骨の上に露はれた。

自分等は晚餐に着いた。伯父さんと甥とは食事が進むにつれて二人の間の話を話合つたが、自分に向つては何ういふ者で、又何故此處へ來たのかと云ふことをも尋ねなかつた。それでも、二人は自分を殊の外歓迎して打ち解けて呉れた。

二人には何處かしら非常に堅實した處があつた。それは彼等が堅い地面の上に居ることを自ら實感してゐると人に思はせる程であつた。然し自分は寧ろ彼等の地面が動

揺して欲しかつた。でも、彼等はどうして自分より優るやうになつたんだらう？

「貴方がたは非國教徒だ、私は然う思ひますがね？」と自分が言つた。

「非國教徒？ いんや。」と伯父さんが答へた。

「それなら貴方がたは國教徒でなくちやならないぢやありませんか？」

甥は眉を顰めた。が、伯父さんは肩を縮めて頬笑んだ。

「それぢや此の人に儂たちの旅行券を見せた方が好いだらうよ、ミクハイロ、え？」

自分は無茶なことを言つたものと気が付いた。が別に最う何とも言はなかつた。

「私は貴方がたの旅行券を拜見したくはありません。只だ思想を伺ひたいのです。それが私が此方へ來ました譯なのです。」

「儂等の思想？」と伯父さんが叫んだ。「畏まりました閣下。思想だ、注意なよ！」

それから彼は大きな聲で哄笑したが、まるで隣家の馬が嘶いたやうに響いた。然しミクハイロは茶を點れながら黙つて觀てゐた。

「儂は貴方が來られたから此處へ集つたのだ。ヨナシユ教父が儂等の處へ人を寄越したのは貴方が初めてぢやない。彼の人は品性の鑑定家で、滿更の木偶は儂等の處へ寄越さなかつたつけ。」

伯父さんは掌を額に當て、斯う叫んだ。

「そんなに意地の悪い顔付をしては困るね。まあ、さう秘藏のものを晒露してはいけない。あまりためにはならんよ。」

彼等は明かに精神上の富者だと自認してゐるのであつたが、その人達に比べると自分分はたいの乞食に過ぎなかつた。彼等は餘り急いで、その智識の泉で自分の心の渴きを癒やして呉れやうとしなかつた。自分は二人と争つて見たかつたが、何う切り出して可いか解らなかつた。——それが益々自分を苛立たせた。

「木偶と云ふのは何う云ふことですか？」と自分は出放題なことを言つた。  
すると伯父さんが答へた。



『木偶の頭腦の中へは勝手なものを何でも詰め込むことが出来るんです。』

ミクハイロは徐かに自分の方へ遣つて来て、優しい聲で、突如に斯う言つた。

『貴方は神を信じますか？』

『はあ、信じます。』

然し自分は此の間に答へて困つた。そんなことを言はなければよかつたのに。自分は眞實神を信じてゐたらうか？

『それから民衆を尊敬しますか？』

『いゝや。』と自分は答へた。『尊敬しません。』

『民衆は神の像で創られてあるとは思ひませんか？』

伯父——この野郎——は日向に置いた銅の湯沸のやうに輝いた。

『いやいや。』と自分は思つた。『人間はそれ等の民衆と公平に戦はねばならぬのだ。自分の智識は細片に碎けて了ふ、民衆は臆て又それを、もと通りに一緒に続けるだらう。』

50

『廣く民衆を観察すると』と自分が言つた。『自分は神の力を疑ひます……』

又しても自分は本意ない事を言つたと思つた。自分は民衆を解する前に神を疑つてゐたからである。ミクハイロはつくづく、と自分を見詰めた。そして又伯父さんは室の中を重々しく踏み歩いてゐたが、髭を撫で、柔しく唸つた。自分は心にもないことを言つて彼等に屈從したのを耻しく思つた。自分の心は判然と自分に見えて、今しも愚かな混亂の狀態に在るのが分つた。それで自分の思想は恰も驚かされた蜜蜂の群のやうに、騒がしく唸つた。自分は忿然としてそれ等の思想を追ひ出して了つて心の中を一掃したいと思つた。それで少時言葉の辯論的に渡るのを頓着せず喋つた。いや、實際は、殊更に紛糾かして喋つたのである。とうとう自分は疲れて了つたので、怒つた調子で斯う言つた。

『ところで、貴方がたは私の病める心を何うして癒して呉れますか？』

ミクハイロは自分を見ずに、徐ろに答へた。

『私は貴方が病的な状態に在るとは思ひません……。』

然し伯父さんは大口を開けて笑つた——恰當惡魔が天井を突き破つたかのやうに哄笑したのである。

『心の病氣といふことは、人間が自分を自覺してゐないで、只だ自分の苦痛を認めて其の苦痛の中に棲息してゐる場合にのみ言ひ得るのです。ところが貴方に就て言つて見ると、誰が見ても貴方は自覺を失つてゐやしません。貴方は生の歡樂を求めてゐるのであつて、それは健康の人でなくつてはしないことです。』

『ですが、私の心の此の苦痛は何處から來るのでせう。』

自分は齒軋りをした。其の青年の落着き加減には、とても自分は我慢が出来なかつた。

『苦痛は私に取つて愉快であるといふことが、貴方は慥に分りますか?』と自分が言

つた。

彼はまともに自分の顔を眺め、徐かに自分の心に釘を立てた。

『貴方は正直な人として、精神上の苦痛は貴方には必要なものであることを認めなくちやなりません。』と彼が言つた。『さうすれば其の苦痛は貴方を群集の上高く揚げるのです。そこで其の苦痛は貴方を群集から區別して呉れる物として尊ばねばなりません。然らばぢやないでせうか?』

この男は四旬祭の説教者のやうに萎びた瘦面であつた。その眼は次第に險しくなつた。彼は頬を敲いた。そしてその眼光は恰も振錐のやうに自分に突入つた。

『貴方が他の人々と混ざるのを恐れてゐるのは明かです。多分、自分で考へてゐるでせう。斯うです、人々は厭はしいものである、然し猶ほそれは自分にのみ厭はしいもので、自分以外の人には何にも厭はしきものでない。』

自分はそれに答へたかつた。が、適當な言葉が見付らなかつた。彼は自分よりは年

も若く身體も弱々しかつたが、而も自分は彼より愚かであるとは信じられなかつた。『ですが、若し貴方が其の點て人々とは優れてゐると信じなされるなら、それは間違つてゐますよ。誰だつてそれと同じ迷想を持つてゐます。それが即ち人生の薄弱で不完全な所以です。人間は誰しも皆んな人生を遁れて、大地へ自分で穴を掘つて、その中から勝手氣儘に世の中を眺めようとしてゐます。だから人生は一の哀れな悼ましいものに思はれて來るのですが、それは人生を然らざる觀る隱遁者輩の氣分としつくり調和するのです。私が今話してゐるのは、隣りの人の背中へ飛び付くだけの力が無くて、ご馳走にありつくことの出來ない人たちに就て言つてゐるのです。』

その言葉は自分を苛立たせた。此の人等は自分を侮辱してゐるやうに思はれた。

『元來、人間の理性に反した、悼ましい生活は、最初の人間の個性が、奇蹟の力を備へてゐる民衆を離れ、總ての母たる群衆を離れて歩き、自分の孤獨と無力とを恐れて下らない煩惱の塊の中に閉ぢ籠つた時から初まつたので——其の塊は「我」と名付けら

れたものです。此の「我」と言ふ奴は人間の最も憎むべき敵です。一體、此の「我」といふ奴は、自衛と自負との爲に、人類に於ける精神上の富を削る總ての知力と總ての偉大なる才能とを無益に殺して了つたのです。』

恰も自分に親しみの多い話を聽いてゐるやうで、また自分が長い間密に待つてゐた言葉を今しも聽いてゐるかのやうに思はれた。

『其の「我」と云ふ奴は、精神上には貧乏人で、また何物をも造る能力がないのです。人生に就ては聾で、盲目で、睡者であつて、其の目的と言つたら、只だほんの自己防衛と、安易と満足だけなのです。ところが外部から散々小突き廻された揚句、無理押し付けに押し付けて、やつとのとて、新しい眞に人間らしいものを創るのみです。すると、他の「我」といふ奴等はそれを尊敬することが出來ず、却つて憎んで虐待します。それにも拘らず、「我」は自分の離れた全體と關係を斷つことが出來なくて、細かく截斷された個々を最ら一度結び付けて大きな一體にしよとするのです。』

自分は驚いて聽いて居つた。それは明瞭で解り易かつた。——否や、嘗に解り易かつた許りでなく、如何にも自然で、そして道理に適つてゐたのである。それは言葉にこそ現はされなかつたが、自分が久しく懐いてゐた思想と恰當同じものであつた。然しその言葉は今しも現はれて来て、互に好い具合に結び付き、大空に通ずる梯子段を拵へたのであつた。

自分はヨナシユ教父の言つた言葉を憶ひ出した。するとその言葉は再び自分の心に活躍して来た。其れと同時に不安を感じて、恰も春の日に解けた氷山の上に立つてゐるやうに心が動揺いたが、その言葉は如何にも分明して美しく見えた。

伯父さんは知らぬ間に室を出て行つて、只だその甥と自分とが残つてゐた。燈は點けられなかつたが、月光が室内に漲つて、眩い霧は自分の心に澎湃と満ちた。

ミクハイロが話を終へたのは夜半すぎであつた。彼はそれから自分を庭の小屋に連れて行き、そこで二人は枯草の上に寝た。彼は直に眠りに落ちたが、自分は外へ出て

月光の中に坐つた。

月と二つの大きな星とが、夜番のやうに大空を横ぎつた。丘の上には鋸のやうにぎざ／＼した林の壁が、青空に瞭然と立つてゐた。が、丘腹の木は悉く倒されてしまつて、眞黒な穴の幾つも穿いてゐる土は負傷して残された標的のやうに見えた。下の方では工場が唸つて煙を吐き、屋根の上からはちら／＼と焰が舌を出して、自由を得ようと藻掻いたが、煙の中に消えた。空氣は何か燃えるやうな臭に満ちて、息も吐けない程であつた。

自分は人間の悲しい孤立を想うた。ミクハイロの話は興味の深いものであつた。それは彼が確な信念を以て話したからである。自分はその意見の徹底してゐるのを認めた。然し何故この人等は自分に冷淡なのであらうか。自分の心霊と其の人の心霊との間には同じ血が通つてゐるやうな氣がしなかつた。のみならず、恰も砂漠に居るやうな寂寞を感じたのであつた……。

不圖ミクハイロとヨナシユ教父の言葉が一致してゐるのに氣が付いた。で、自分は其人達の思想を充分に會得したと思つた。が、それにも拘はらず、自分の心の奥底には何處かまだ腑に落ちない所があつて、その言葉を疑つた。

自分の立場は何うであつたか、そしてまた其人達の思想と全く相反してゐた自分の思想は何うであつたか。自分はまるで疑惑の渦中に投じられたやうで、双方の耳は渦巻の速度が増すに従つて益々鳴るのであつた。

汽笛が工場から響いた。最初は優しく悲しげに響いたが、忽ちにして鋭い金切り聲に高まつた。黎明が寐ぼけ面をして山の上に現はれると、夜は再び衰へて、樹木を包んでゐた帳帷を徐かに取つて、谷間や山峽に隠して了つた。荒廢した地面は生地を露はして廣がつてゐたが、其處等一面は恰も暴慢な巨人が暴れ廻つて立木をば悉く地面から引つて抜いたやうに荒らされて、地面は傷痕口を大空に向けてゐた。此の山峽の窪地に、埃を被り、脂にまみれ、そして煙に包まれた工場は哄笑したり唸つたりした。

眞黒な人々が四方八方から此處に集つて來た。すると工場の口は彼等を順々に捲き込んだ。

「彼の人達は」と自分は思つた。「神を創る人達なのだ！」

伯父さんが庭へ遣つて來て、欠伸をしてゐた。頭髮は亂れて、體の節々が鳴つてゐた。伯父さんは頭髮を搔いて、自分を見て頬笑んだ。

「やあー」と彼が叫んだ。「もう起きましたかね？」  
そして直にまた親しげに斯う附加した。

「したが、多分貴方は少しも眠らなかつたのですね？ まあ、それはどうでも好いさ。晝になれば一眠やるさ。ところで、お茶は欲しくはないかね？」

二人のお茶が濟むと、伯父さんは言つた。

「ねえ、お若者、儂も是れまでには眠らない夜を長い間過して來たものだ、一時は大層苦しみましたよ。兵隊に行く前てさへも心はなかく苦しんだ。ところが或る下士

官が儂の頭の上から怒鳴り付けたのが原因で、右の方の耳がとうとう聾になつて了つた。其の當時或る外科醫が儂の非常な親友でしてね。お蔭で儂は……」

彼は「神」と言はふとしたが、疑と怵へて、髭を毛つて笑つた。その態度には何處やらに無邪氣な處があつた。そして其の心措きなく見る眼にも無邪氣な表情があつた。

「その外科醫と云ふのは眞實の善人でね」と彼は話し出した。儂の耳を診察すると、何うして此んなになつたのかと訊くのです。で、儂は事實を言つた後で、貴公は儂のやうな斯う云ふ生活でも人間と言ふことが出来ると思ふか何うだと尋ねた。すると外科醫が言ふには、「然うだ、物事は總て變じ改めることが出来る。ピーター・ヴシレヴさん、儂がお前さんに經濟學のことを少し教へてみよう。」と言つて、彼は直ぐに其の場で教へにかゝつたのです。初めの間こそ儂は何が何やら、さつぱり譯が分らなかつたが、總ての不條理なこと——それは尤もこれまでも行はれて來たし、又將來も行はれるであらうが——つまり人間がそのために苦しむ不正と云ふことが間もなく解つて

來た。儂は嬉しくて氣が狂ひさうでした。「お、不埒者め！」と儂は叫んでやつたつけ。精神上のことに就いて、貴方は何時も直に結果を考へなされるが、初めの間は新しい言葉の外何も耳に這入らない。が、そのうちに總ての物が整ふ瞬間が來て、瞭然して明かになつて來るのですよ。此の瞬間が眞實の新生なので——まことに不可思議なものですよ。」

伯父さんの顔には慈悲深い色が漂ひ、眼は柔しく微笑んだ。そして刈り込んだ頭を頷いて言つた。

「そして貴方の場合も其れと同じだ。」

自分は彼を見ると愉快を覺えた。その様子の無邪氣さは愈々増した。と、自分はまた彼を羨んだ。

「儂の生涯の三分の二は馬のやうに働いた——お恥かしい次第だ。然しまあ、そんなことは何うでも可い、これからそれを償ふとしませうよ。したが、儂の頭脳だけは何

うも極めて不透明なのだ。頭脳も手のやうに、練習を要するもので、儂の手は頭脳よりも利口です。」

自分は彼を見て考へた。

「なぜ此の人達は何でも喋つて平氣なのだらう？」

「それが、」と彼は續けて話した。「ミクハが充分二人前の理解力を持つてゐる理由です。彼は色々なことを掻き集めてゐるから、何かを發表するまでお待ちなさい。工場の牧師は彼を異教徒だと言つてゐる、然し彼が神に就て深い確信を持つてゐないと言ふことは氣の毒な話です。彼のさうした知識は、母親から貰つたのだね？ 母親と云ふのは儂の姉妹で、獨斷をやらかすので有名な女であつた。彼女は正公會を去つて、非國教徒に移つたが、非國教徒は彼女を破門したです。」

伯父さんは喋つてゐながら始終出て行く用意をしてゐた。あちこちと足を踏みつけるので、そのたび毎に、四圍の物が皆んな鳴つて、その足下の床板は煽つた。それが

自分には殊の外滑稽であつた。と、同時に、自分は喜んで彼を見成つてゐた。

「此の人達は、何う云ふ種類の人間なんだらう？」と思つた。そこで斯う言つた。

「こちらで三日間だけ泊めて貰へますでせうか。」

「可いですとも。」と彼が答へた。「お氣に入つたら三月でもお泊りなさい。些つとも邪魔にはなりません。あゝ神よ感謝いたします！」

彼は頭を掻いて、笑顔で言つた。

「どうも「神」といふ言葉が始終口に出るが、これは習慣の力です。」

再び工場の「汽笛」が鳴つた。すると伯父さんは急いで出て行つた。で、自分は小屋へ這入つた。其處にはミクハイロが、眉毛を陰氣に窄めて寝てゐた。兩手を胸に載せて、顔には眠りが漂つてゐた。彼は少しも髭がなくて、顔が怖しく角張つてゐた——  
實際、ほんの皮と骨ばかりであつた。

「一體何ういふ種類の人達だらう？」

そんな事を想ひながら、自分は眠りに落ちた。

二十四

眼が醒めて見ると、金切聲や、唸聲で大變な騒ぎであつた。まるで悪魔といふ悪魔が悉く寄り合つて、叫んで居るやうであつた。戸口から覗いて見ると、庭中が子供等て充滿でその中央にミクハイロが居た。眞白な上衣を着て居るので、恰當一艘の帆前が小さな獨木舟に取圍かれて居るやうであつた。ミクハイロが其處に笑ひながら頭部を反らし、口を開け、眼を半ば閉つて立つて居たので、些とも昨日のあの悄たれた其人らしくなかつた。子供等は青や赤や薔薇色の上衣を着て、日向で騒ぎ廻つたり跳ねたり叫びたりして居た。それに惹きつけられて小舎から竊つと出て往くと、一人の少年が自分を發見して怒鳴つた。

『諸君を覽なさいよ、出家だ。』

一堆の乾燥いた鋸屑に、火を放けたやうに、子供等が渦を巻いて自分の周圍に駆け出して來た。

『あれをを覽なさいよ、あの赤い頭髮の毛を！』

『變な頭髮だねえ。』

『甜めに來るよ。』

『からかふなよ、噛み付くぞ。』

『出家ぢやなくてよ、寺院の塔だよ。』

『先生！ 彼は何人なんですか？』

すると先生少々應答に困つたから、小さい悪魔どもは哄と笑つた。自分は何故そんなに可笑しいのか解らないながらも、子供等の愉快さうなのに釣られて、噴出してしまった。而してかう叫んだ。

『靜かに、靜かに、小鼠共！』



太陽は氣持よく輝いて、種々な聲が空にざわつて居た。周囲の事物はみな歡樂に  
慄ひて、此處彼處と虹色の渦になつて跳び出した。自分はその光線に目眩み、温みに  
包まれた。ミクハイロは眞情の籠つた握手をして呉れた。

『私等は森の方へ行くんですが、貴方も一緒に行きませんかね。』と彼は言つた。

總ての光景は眞に美しかつた。肥つた小悪魔が自分の帽子を引つ攪み、それを被つ  
て庭中を蝴蝶のやうに飛び廻つて居た。

自分はこの亂暴者の一隊と森へ出掛けたのだが、その日の事は決して忘られない。

子供等は急いで市街をゆき、それから風に吹かれる羽毛のやうに山へ駆け上つた。

自分は牧師と一緒に従いて行つたが、こんな美しい子供等を見たことがないと思つた。

自分はミクハイロと其の後方からついて行つた。彼は大きな聲で種々な號令をした

が、子供等は少しも頓着しなかつた。押し合つたり、跳ね廻つたり、松毬を投げ合つ  
たりして喧嘩をした。それから厭いて來ると、自分等の周圍に群かつてきて、甲虫の

やうに這ひ廻つたり、先生の腕を引張つて、草や木の事を尋ねたりした。ミクハイロ  
は自分等の朋輩で、もあるやうに子供等に親切に言つて聞かした。子供等はみな快活  
で元氣があつた。中には眞摯くさつて、年齢の割合に早熟な者もあつたが、さういふ  
連中は先生の近くに許りつき纏つて、口を利かないでゐた。

この子供等の一隊が再び幾らか散らばつた時、ミクハイロは低い聲で自分に云つた。  
『彼等は只だ勞苦と、泥酔との爲に生れて來たのでせうか。彼等各自は潑刺な精神の  
容器です。それ／＼思想上の發達に貢献して、疑惑の羈絆から吾々を解放する事が出  
來るのです。然しさうはしないで、皆な祖先が悲惨に歩いて來たとおなじ狭い陰氣な  
道を辿つて居るのです。働かされて、考へることを禁ぜられてあるんです。彼等の多  
くは——否總ては——隋力に服従し、それに甘んじて居る。其處に有らゆる地上の不  
幸の本源があるので、人間精神の自由な發達など、云ふものは些ともないのです。』  
ミクハイロが斯う話してゐる内に、近寄つて來て何を言つてゐるのかと疑と聽いてゐ

る少年もあつたが、そのまたうす恍惚した容姿が可笑かつた。こんな生若い生の支流が、ミクハイロの云ふことを聴いて一體何が解るか。自分は不圖、よく自分等の頭を鞭で打ち、始終酔拂つて居た自分の先生のことを追想した。

『人生は恐怖に満ちて居ます。』とミクハイロが云つた。

『人間の精神の力はお互に憎悪に浪費されて居るのです。現在のやうな人生は實に忌ましいものだ。が、子供等に自由な發達を遂げるだけの時間を與へ、そして、夙くから牛馬のやうに取扱はれさへしなければ、彼等は自由に且つ大膽に青春の漲るやうな智力の横溢と、活動して撓まざる渴仰の宗美とでもつて、内外から人生に光明を齎らすであります。』

金髪、碧眼、紅顔は到る處に、活きた花のやうに、深緑の樅の木から浮き出してゐた。新生活を告ぐる此等小鳥の樂しさうな哄笑と歡聲とが朗らかに鳴り響いて居た。『この美しさがみな人間の貪慾に蹂躪られて了ふのです、それにどんな意味があるで

せうか。可憐しい優しい子供が生れて快活に幸福に育つても、一度大人になると、卑劣なことでしか覺えないで、浮世の辛酸に唸つたり、妻を擲つたり、酒に悲哀をまぎらさうとするのです。』

ミクハイロの言葉は、言はゞ自分の思想に對する返答のやうに聞えた。

『人間は生ける神の唯一の眞正な殿堂である民衆を亡ぼして居るのです。而して破壊者たる人間は、此の渾沌たる廢墟の裡に自身の破滅を發見し、そしてその耻づべき事業に克く眼を睜つて「怖ろしや」と叫ぶ。それから彼處此處と駈け廻つて「何處に神は居るか」と叫んでゐる。彼等は手づから神を殺したのです。』

自分は露西亞國民の分裂を論じた長老ヨナシユの言葉を想起した。そして自分の思想はミクハイロが今云つた事と全く一致して居た。只一つ自分の臍に落ちないのは、どうしてそんなに穩かに些しも憤らないで、彼のいふ此の人生の壓迫なるものを、まるで過去のことでもあるやうに言ふことが出来るかと云ふことであつた。

大地は樹脂や花の温味のある心地よい香で芳ばしかつた。鳥の囀る聲が、四圍の大氣に漂うてゐた。

子供等——森の沈黙の征服者——は樂しげに駆け廻つて居たが、自分は實は此時まで青春の力と美を眞に理解したことがなかつた。

ミクハイロは、靜かに微笑して、如何にもうまく、此の少年等と打解けてゐた。自分は微笑して彼に言つた。

「ちよつと失敬して少時、獨りで瞑想に耽つて見たいんですが。」

彼は自分の方を見たが、其の眼は輝き、其の睫毛は震へてゐた。而して自分の心臓の動悸がこれに應へた。

自分は友愛を享有することは出来たが、從來その經驗に乏しかつた。で、ミクハイロに言つた。

「貴方は豪い。」

彼は當惑して伏目になつたので却つて自分が非常に當惑つた。少時は無言で並んで起つて居たが、臆て二人は別れた。

遠方から彼は自分に叫んだ。

「餘り遠方へ往かないが可いです、道に迷ふから。」

「有り難う。」

自分は森の中へ這入つて、或る場所を選んで腰を下ろした。

子供等の聲は遠方に聞え、その笑聲は濃やかな葉隠れを縫ひ來て、嘆息のやうに森の中に響き渡つて居た。栗鼠は頭の上に戯れ、一羽の鶯が頻りに囀つて居た。自分は心の奥で此の數日間に見たり聞いたりした事を纏めてみたいと思つた。

恰當それは自分の周圍に罩めて居る華やかな虹とでも云ふやうなもの、中に漂つて居て、自分を其の靜かな波の中に惹入れやうとして居る。自分の心靈は漲り溢れて無限に膨大するやうに思はれた。そして言語で表はすことの出来ぬ思想の雲の中に、自

己の意識を失つた。

自分は夕方家に歸つて、ミクハイロに彼の宗教上の意見に馴染むまで、居たいと云ふことを話し、ピーター老人に何か工場で仕事を見つけて呉れるやうに頼んだ。

「何故そんなに急ぐのです、まあ充分休息して、それから何か書物を讀まなければ駄目です。」

自分は彼に信頼してゐた。

「では貴方の書物を貸して戴きませう。」と自分は云つた。

「何れでもお選りなさい。」

「私は世俗の書物を讀んだことがないので、自分は何も言つた。『何か私に適當したものを擇んだ下さい——例へば「露西亞史」のやうなものを。』

「人間は何事によらず知つて置いて宜いのです。」と曩に子供等に對した時と同じやうに、情深さうに書物を見ながら彼は云つた。

自分は書物の中に埋つて、終日讀書に耽つた。精神は種々に迷つた、同時に腹立たしくなつた。書物が自分に喧嘩を賣るのではない。自分が書物を攻撃するのでもない。或る書物などは自分に大なる苦痛を齎らした。それは世界と人類生活の發達を論じたもので、聖書に反抗したものであつた。至極簡單で、理解し易い、論理的なものではあつたが、その中の何處にも自分との一致を見出すことが出来なかつた。自分はあらゆる種類の力に取捲かれて、畏にかゝつた鼠のやうなものであることを感じたからである。自分は此の書籍を再讀した、靜かに熟讀して自分が自由に逃げ得るやうな缺陷をその中に捜さうと努めたが、全く無益であつた。

自分は先生に言つた。

「何うしたんでせう、此の書物の何處に人間が居るでせう？」

「私も然う思つてゐます。」と彼が言つた。「その書物は間違つてゐる、が何處に誤謬があるかと云ふことは説明する事が出来ない、然しそれでも宇宙の計畫を説明せんとす